

心しん
中ちゆう
二ふた
つ
腹はら
帶おび

解題

享保七年四月六日から大阪の豊竹座に上演された。作者は紀海音(時に六)である。本曲は三段に分れ、紀海音作品中傑作の一つである。

實説

大阪新穀油掛町八百屋半兵衛の妻お千代が、姑の虐待に堪へかねて、享保六年四月五日宵庚申の夜に夫と共に家を出で、生玉馬場先の大佛殿勸進所に行き、毛氈を敷いて其の上に坐し、辭世の歌二首を残して、夫婦共に潔い最期を遂げたことを脚色したものである。委しくは近松作「心中宵庚申」の實説の條に述べた。

影響

本曲は八百屋半兵衛夫婦の一周忌を當込み、豊竹座に上演して好評を博した。そして同じ事柄を仕組んだ近松作「心中宵庚申」(享保七年四月二十二)の機先を制したものである。委しくは「心中宵庚申」の影響の條に述べた。寛保元年五月二十一日から、大阪の豊竹座に上演された「青梅擇食盛」は、本曲を添削して改題したものである。

第一 (山脇邸内)

登場人物の主な者

山脇十藏(濱松藩士。半兵衛の父)

戸田卜齋(弓道師範)

沼津奎之進(卜齋の門弟。半兵衛の舊友)

南條定七(卜齋の門弟)

秦源八(卜齋の門弟)

梗概 半兵衛

衛（十藏の子。三十八歳。もとの名を半六といひ、十二歳の時から藩主の小姓を勤め、長じて大阪新穀油掛町八百屋仁右衛門の養子となる）

春の頃、遠州濱松の藩士山脇十藏の外出中に、弓道師範戸田ト齋は十藏の射場を借りて、門弟沼津李之進・南條定七・秦源八に弓術の稽古をさせてゐる。折から十藏は、大阪新穀油掛町八百屋仁右衛門方へ養子に遣はした我が子半兵衛と共に其の場につて来た。半兵衛は年に一度の人数改めの爲に歸國した者で、嘗てト齋に弓術を習ひ、李之進等とは同學の友であつた。

ト齋は十藏に射場を借用した挨拶を述べた後、「半兵衛氏も李之進氏と立合つて勝負してごらうじろ」と勧めた。然るに李之進は半兵衛よりも武藝劣り、且つ十藏に心よからず思つてゐるので、半兵衛が商人であるを態と卑しんで立合はない。是に於てト齋は、然らばとて柔術の試合を勧めた。李之進は不承不承に半兵衛と立合つて投倒され、怒つて罵言雑言を極める。半兵衛胸に据ゑかねて決闘に及ばうとする。十藏は半兵衛を戒め、穩便にをさめて別れた。

其の夜半兵衛は残念に堪へず、李之進を討果して死なうと覺悟し、側なる視箱引寄せ、行燈をかき立てて書置を認める。父は窃に其の様子を窺ひ、白無垢の衣に著換へて尻ひつからけ、手鍔提けて飛出る。半兵衛ハツと驚き、「父上何事でござる」と問ふ。十藏「汝も知る通り李之進が今日の雑言聞捨てにならず。元來無骨漢の彼奴めは、かねて我が娘を妻にと所望したけれども、之をきつぱり斷つて、山名郡の代官豊田新之丞と娶はす事に契約した。ところで彼奴が其の意趣を根に持ち、思ひも寄らぬ汝にまで、恥辱を加へた段はさぞ無念であらうが、免してくれよ半兵衛。其方が面目は父が立てて遣ら」とてまた飛出す。半兵衛は父に繼り附いて之を諫止する。父「然らば其方も李之進を討果す決心を翻してくれよ。思ひ出すは其方が半六と云うて小姓であつた時、主君の仰に、相人が半六を見て劍難の相があると言つたから、彼を町人にして一命を繋がせよ」とて、其方が致仕の形見に、主君から藍鮫の脇差を拜領した。其方を八百屋の養子に遣はしたも其の爲である」と、主君の情心を語つて懇に説諭した。そして其の書置を入れた状箱を終生開かぬやうに封印して渡し、「どうぞ死んでくれるな」と言ひ聞した。半兵衛は始終を聴きす

まし泣いて得心する。

折節丑三つ(午前二)の鐘鳴り、馬子が驛馬を牽いて来る。乃ち半兵衛が大阪歸りの荷物を馬の背に積み、「どうぞいつまでも健全であるやうに」と、父子互に名残を惜み、父に見送られて大阪の養家に歸る。其の別れの笑顔も、再び逢はれぬ名残となつた。

この段、半兵衛父子の性格と情愛とを表はさうとして技巧を凝らしてゐる。侍氣質の半兵衛は、空之進を斬つて死ぬべきであつたのを、父に諭されて長らへた。然し劍難の運命はいつまでも附纏ふものとなつて後文に繋がる。これ等の技巧著想共に常套

○櫻坊様 女は櫻の如しといふに、櫻の實を櫻坊といへば、それにひかけて坊様につづけた。

○山吹衣 山吹色(黄)の衣。この文は、若衆を梅、女を櫻、坊様を山吹、武士を牡丹に譬へたのである。

○眞袖 兩袖。

○うぶに染みたる 單純な性質に染りたるをいふ。

○紅の園生 紅は、べにの花をいふ。人に勝れた者は必ず世に顯はれるとの喩にいふ。講曲「安室」に、ゆにや紅は園生に植まても離れなし、強力にはよも目を懸けじ。

○末葉 後裔。「徒然草」第一段に、「竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごみなき」。

○家中 武家にて家來をいふ。

○小身 秩祿低き武士をいふ。

心中二つ腹帯

草に木に譬ふて見れば若衆梅、女は櫻坊様の山吹衣眞袖より、牡丹の盛り凜とした武士の姿は自から、うぶに染みたる紅の園生の種や末葉まで、わきて遠州濱松は御家中廣き其中に、小身なれど手を置いて重き山脇十藏の、屋敷造のお物數寄其折節の月花に、代ゑて嗜む武藝の道術も深き藪垣の、向ふに目あての柴を構へ本弓の稽古的、戸田卜齋を師範に立門弟沼津李之進、南條定七・秦源八いづ

○手を置いて 人々が彼にはかなはぬと手出しをしないで。

○重き山脇 重んぜられると、山の重きと、その山を山脇とにいひかけた。

○砌 庭。

○塚 弓を射る稽古的をかける爲に、方錐形の上部を推斷した如き形に土を築き上げたもの。

○本弓 征戰などに用ひる六尺餘の長さある弓。

○射法力 射術を行ふに當つて、拳を固め肘を張つて力を入るること。

○群の肉置 力殖。群は肉團、ししむら、肉置は肉附の意。井原西鶴撰「二代女」卷一、國主の艶妾の條に「腫しまりてし、おき通しからず」。

○残る所はなけれども 残らず注意してぬかりはなれども。

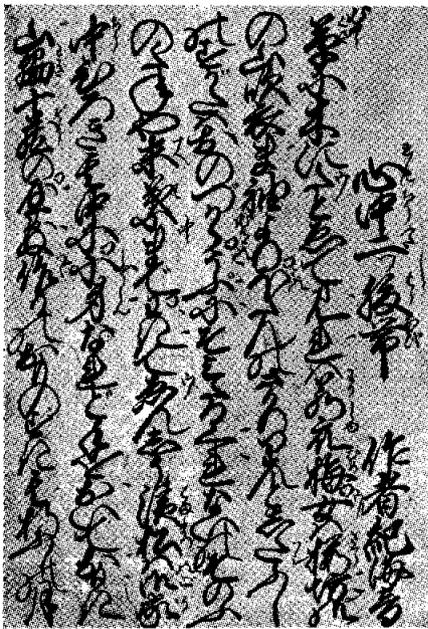
○一分 一身。

○射る事は君子に喩へ 「論語八佾篇に「子曰、君子無所爭、必也射乎、揖讓而升下、而飲、其爭也君子」。

○同苗 同じ苗字。半兵衛は十藏の子である。

○品 折、場合。(見索引)

れも弓矢引番ひ、拳を固め肘を張り鎌を揃へ聲をかけ、我劣らじと争ひしは嚴めし、うこそ見へにけれ、卜齋はつくくど稽古に氣を附目を配り、「ホウ各見事見事、射法力の入れ所群の肉置矢の輕重、羽の吟味に至るまで残る所はなれども、



どうでも體が固まらぬ強ち人射勝たふと、思ふばかりは剛みでない一分に油斷なく、工夫の心坐りなば自然と的中致すもの、既に孔子の曰ふにも射る事は君子に喩へ、中らざれば其身に

求む、手前を直し随分と功を積むこそ第一」と、さも細やかに言ふ所へ、主山脇十藏は同苗半兵衛諸共に、彼處に歸れば卜齋、ハア、十藏殿お歸りか、豫てお心安さのま、お留守をも顧みず、射場を借用仕りゆるく稽古致す段、無禮の至りと相違ぶる、十藏會釋して「是は扱痛み入る、好い場を持って品により物干にさ

○人數改め 戸籍調べ。

○判形 印形。捺印の悉にいふ。

○八ツ 二時。

○無亭主 亭主が外出して居台はせなかつた事。

○如在者（まゐりもの） ありのままの者の稱であらう。存在「ぞんざい」者。索引によつて「じよさい」を見よ。

○珍重 珍しいとて重んずる義。轉じて、めでたらしい。

○花叢 叢に花を附けた紋所にこの稱あるによつて其の語を用ひ、そして武士の花と叢（半兵衛の家は大坂新御油掛町八百屋である）をいひつけられた。

○究竟 至極の義。究は頂の極をいひ、竟は事の極をいふ。「三藏法數」に「究竟領」至極之義。

○骨柄 はねぐみの様子。容姿。

○はつかう 「發行」であらう。もてはやされること。

へ貸すならひ、ましてや御念比といひ殊には豫て極めの稽古日、在宿致す筈なれども、同苗半六只今は名も半兵衛と改め大坂の住居、町人に罷り成り候へども當所の人數改めにて、年に一度は極まつて判形に罷り越す、其儀によつて今朝より御役所へ召連れ出で、それより一家のはし／＼へ暫しの對面即ち今夜八ツ立に大坂へ立歸る、用意何かに取紛れ無亭主の段御免あれ、コリヤ半兵衛、以前のお師匠友達衆對面致せ」と詞の下、半兵衛懇懃に、「まづ以て卜齋様、御息災に御凌ぎ、偏に満足仕る、師弟のちなみ折々は御恩の御見舞申す筈、何をいふても只今は商人の身の忙がしく、年に一度の參著さへ昨晩參りて明朝は、罷り上る仕合故、自からの如在者御免し下さるべし、本之進殿定七殿、源八殿を始めとして御無沙汰ばかり、顔見れば昔を思ひ懐かしい、まづは御無事で珍重」と身は町人を卑下しても、どこやら武士の花叢八百屋さするぞ惜しかりし、卜齋は手を打つて「扱も扱も久し振り、山脇半六時分より殊の外肥満にて、究竟な若者其骨柄を見るにつけ、思ひ出すは貴方の藝、今まで鍛鍊せられなば、恐らくはつかうせんものと、常々皆とも此噂町人とても隠し藝、折節射ても見らるゝか、いかに／＼」と問いかく

○宮地 神社境内の地。祇園社境内などは弓を射る場が設けてある。

○半弓 大弓の半分程の長さで、坐して射ることを得る弓。

○東寺 京都東寺あたりは往時瓜の名産地である。よつて瓜時分（こまのべ）というた。「雍州府志」に「甜瓜（こまのべ）俗學賞之、所々有之、然東寺遊其味爲勝、世稱東寺眞桑」。

○狛野 京都から奈良へ行く道に當り、越瓜（しろうり）の産地。「雍州府志」に「越瓜（しろうり）諸國皆有、特山城狛野（こまのべ）多種之實（こまのべ）京師」。

○よつ引きひやうどやる 「よつ引き」は能く引きの音便。「ひやうど」は、矢の弦をはなれる音にいふ副詞。謡曲「鶴」に「よつびきひやうど放つ矢」。

○舌ぶるひ 恐怖するをいふ。

○ひがいす 瘦せ細つて弱々しきをいふ。唐書この語は、形瘦せて骨高き魚の名「ひがい」から出たものであらう。

○手を置かれ 前文の「手を置いて」の註を見よ。

○まへかど 以前。

○五角 力量の互に優劣なきこと。

る、半兵衛は打笑ひ、「仰せの如く私めも折角習ひ受けたる弓、何しに捨ては致さねども、町屋に道具散らばはねば元より學ぶ人もなく、宮地を心懸くれども流行るは稽古淨瑠璃で、半弓も見當らず、たま〜事に瓜時分東寺狛野へ行く足を、祇園の方へ駈廻り稽古を見ればぞく〜と、遠慮も忘れ肌押脱ぎ、よつ引きひやうどやる風情、座中舉つて舌ぶるい、庭弱な男じやが、さつても怖い弓力と、手を置かれて歸りしも偏に師匠の御蔭ぞと、あた粗略には存せねども、青物賣りの風情ゆへ、残念ながら何時となふ、消へて仕舞はん是非なさ」と謙遜つてぞ語りける、「ム、さこそ〜推量した、五年十年射ぬとても心を捨てねば下らぬもの、幸ひ柴も構へてあり久し振じやに只一手、其上是なる李之進前かど互角の藝なりしが、荒むと勵む違ひにて及びはせまいさりながら、互に挑みし所縁ありいざ立合つて勝負あれ早々見ん」とぞ勧めける、半兵衛押退り「左様の論は武家の沙汰、我々しきが何ともはや、御免〜」と辭退する十藏は聲をかけ「未練に見ゆる半兵衛、差當て、お師匠の仰せを背くは無禮なり、手練達者の沼津殿町人の身が射負けしとて、少しも恥にならぬ事、罷り出でよ」と弓と矢を取添へて與ふれば、

○收めし おちついてすまじこんた。

○不興 機嫌を損じたること。

○氣不精 氣分の引立たぬこと。

○得て ややもすれば。こもすれば。

○且は 一方では。

○さらぬ顔 さあらぬ顔。さうでもない顔附。

○手が悪い 仕打がよくない。近松作「源氏鳥帽子折」に「飲違ゆるは手が悪い」。

○吹かぬもの 自慢に言はぬもの。

○五社明神 濱松市利町(こままち)五社公園内にある。武甕槌命、經津主命及び外に三神を合祀す。今の社殿は寛永十八年徳川家光が再建した物で、權現造で國寶に指定されてゐる。「國花萬葉記」に「五社大明神」濱松社領三百石。

○掛川 遠江國小笠郡掛川町。

○ゐもぎ 「いものき」(射物儀)の約で、儀式たつた後射會の意であらう。

○こぶし 拳をかためて弓を射ること。

○先立つて さまじつころ。

答に及ばず立上り、李之進殿さりとては、久しう振のお相手」と、言へども收めし不承顔、かぶりを振れば半兵衛「相手の不足は兎も角も、不興に見ゆる御出で」と詞を掛くれど返事もなく、苦り切つたる其風情定七見かねつゝと立ち、一時によつては氣不精に進まぬ事も得てあるもの、某相手」と言わせも果てず李之進聲を上げ、「ア、是々入らぬもの、師匠の御意を承る我等さへ動かぬに、外の媒介心得ず控へられよ」と詞の下、「然らば拙者參らん」と源八やがて立つ所を、鎧を取つて引留め、「ハレヤレ世話をやく衆かな、相手になれば何れもの名が廢るが合點か、且はお爲を存する故是非〜お控へなされよ」と、物ありげなる有様に座はしら、けてぞ見へにける、半兵衛もなまじいに無念に及べどさらぬ顔、「李之進殿手が悪い貴殿の藝を仕上げしとてさのみ高ふは吹かぬもの、今は格別其以前互に勝負を較べし時、五社明神の後堂百本が一本も、徒矢なしに見せつけ又、掛川の大會にも二日續けてゐもぎに勝ち、其外機により折にふれ餘程手懲りの覺がある、其の意趣ならば猶以て、わつさりと立合はらいざ御出で」と言ひければ、李之進はせ笑ひ、「珍しい事いふ男、シテまづ其方が某と弓の拳に勝つたとな、ハテ先立

○弓を引く 反抗する意にいふ。

○見よ 見よう。

○曲 面白味。ゆかしい滑稽。

○取手 捕縛術をいひ柔術の一種。

○要害 敵を防ぎ我を守ること。この語も、我に在りては要害なり敵に於ては害なる地形險固をいふ事の轉用。

○嵩に掛かる 勢づいて居丈高になるをいふ。

つて知れた事、シヤ存外千萬な、其時相手に立つたるは慥か山脇半六とて、御家中の武士友達、大坂の八百屋づれ半兵衛とやらん素町人相手に取つた覺がない、いはれぬ弓を引かうより分相應に算盤の、利合を引くが近道」と、さも憎體に言ひこなす、半兵衛今は堪忍の胸に迫りし顔色を、卜齋早く見て取つて眞中につゝと出で、「よしな所望仕出して半兵衛手前某が何とも迷惑致せども、武士の權威を立てらるゝを違つてとも申されず、といふて是で果してはどうも一座が済みにくひ、中取て料簡せん、弓の稽古は取置いてこれから柔術の勝負を見よ、さあさあ急ひで立合へ」とあせれば半兵衛力を得、「いざお相手」と差向ふ、李之進矢り聲、「武士町人の辨へなく再三のお望は、お師匠にも曲なし」と言はせも果てず「ヤア無法なり李之進、もとより弓馬は武士の藝、取手柔術は町人も身の要害に睨みて、すはや取るぞと立向ふに、武士は相手にならぬとて懐手してゐらるゝか、是非立合はざるまいがの、然らば有無に及ばぬこと、さあ〜勝負」とせり立つれば、義に詰められて李之進不承不承に身拵、嚴つがましく「いざ來い」と嵩に掛かつてつゝと寄る、「心得たり」と身をかはし互に當て附け跳ね合いしが、

○ほぐれて 解けはなれて。

○ほうく ほうく。

○表裏者 うはべと内心と相違して誠實なき者。

○切先 刀の尖端三寸程をいひ、最もよく切れる所。

○町人の刃にて侍首の柔術を見ん 町人の柔術にて、刃持つ侍の首をもぎ取つて見せようといふのであらう。心せいで詞が顛倒したものと思へど、さりさて拙文かな。

○差配 周旋。處置。

○五分の持ち 五分々々。

○杯 和解の杯。

○とかう みやかく。

○指南 武藝などを教導するしるし。

半兵衛は手利の達者、ほぐれて蹴返す腰の骨、仰向にどうど倒れしは心地よくこそ見へにける、塵打拂い杵之進ほうく起きて大聲上げ、表裏者の賣人め、重荷に草鞋締め履いて、平生荒氣に働く故、畢竟相撲同然の暴れ業は間に合わぬ、いで眞劔の切先に命の取手を見すべし」と、既に刀に手を掛くれば、ム、町人の刃にて侍首の柔術を見ん」と、飛んでかゝるを定七・源八杵之進に取附けば、十藏は半兵衛を引止めて叱り附け、「お師匠の御差配にて一旦の無念を晴れ、喧嘩は互に五分の持、事相濟んだ其上に假令先から募るとも、最早見ぬ顔聞かぬ顔穩便におさまる筈、此上ながらト齋老杵之進殿心底に、憤りなき様に偏に頼み存ずる」と、さも神妙に言ひければ、ト齋は打領き、「いかにも某受取つて、重ねて杯させ申さん」とかういふ間に日も暮るゝ、「最早お暇申さん」と皆打連れて立ちければ、杵之進振返り、「たま〜腕が利いたとて、いきり立つは商人故、武道は格別劔術が、知りたくば此方へ習ひに來い其時は、さつぱりと首と胴との別れの指南、ぎやつと言わせて見すべし」と、肘押張つて睨み附け、さも憎さげに立歸れば、十藏親子は送り出で、慇懃に一禮し次の一間に立歸り、互に今の無念さを胸に

○若い時の辛勞は買うてもせい、諺。居家必要に「少不動勞、老必艱辛、少能服勞、老必安逸」。

○老いては子に従へ 諺。「大智度論」に女人之體、老則從子。

○とつつおいつ 「取りつ置きつ」の書便。とやかくと迷ふ。

○仁右衛門 大阪新堀油掛町八百屋仁右衛門で、半兵衛の養父。

○べし 「べき」とあるべき所。但かく用ひた例は他にも多い。西鶴なども常に「べき」とあるべきを「べし」と用ひてゐる。

持てども持たぬ顔、十藏は何となく、「コレ半兵衛、夜の短ひに八つ立、草臥も續めた寛いでお寢やれ、」ハア是は物體ない、若い時の辛勞は買ふてもせいと申します、御老體の養ひが大事まづお休みなされませ、」ホウ老ひては子に従へとは得手勝手のことば、然らば行つて寝る程に、追附け微睡召されい」と言ひ捨て奥へぞ入りにける、半兵衛は差俯向きとつつおいつの胸の内溜息、ほつとつき出し、最前の悪言を無念と思ふ私より、百千層倍口惜うお腹が立てなりましたまい、天晴山脇十藏と、誰に劣らぬ武士の身を、半兵衛といふ町人を子に持ち給ふ故により、いかい恥辱を見せまして面目なふてなりませぬ、姿形こそ町人なれ、もと侍の倅じやもの、駈入て死んでくりよ、イヤ、それでは仁右衛門殿、よしない武士の子を貰い、憂き目を見ると悔い恨み、歎き給はんおいとしや、武士と町人二人の親、中に立たる半兵衛は、いづれへ孝を立つべし」と拳を、握り居たりしが、短氣の蟲のせき上げて、兎角城忍なり難く、討果さんと覺悟を極めそつと立て目を配り、奥を窺ひ床にある、硯引寄せ行燈の、火も掻き立る筆の跡死ぬる仔細は書かねども、是までの御恩の書置一通り、さら／＼と認めて、巻納めたる箱の蓋、

○けはしき 心程かならぬ。あわたたしき。この語意し「けあしき」(氣感)の轉語であらう。

○南無三寶 事の心とたがつて辛い時に、南無三寶と祈るより轉じて、失敗した、しまったと思ふ時に發する詞となつた。

○いざ「いざ」あるべき所。

○白無垢 白衣をいひ、死装束である。これに「いざ知らず」をいひかく。

○一興 一つの面白いこと、また反語にして奇怪の意にたま。近松作「重井筒」に「これは「きよ」う、この子は「いざ」うござらぬか」。

○山名郡 明治二十九年廢し、遠江國磐田郡に併せられた。

○代官 江戸時代に幕府直轄又は藩主の支配下の年貢公事人別等を管理する地方官。

○家督を立つる 我が子の十六(全兵衛のこと)は親類の相ありとて(この事後文に出づ)八百屋へ養子に遣はし、新之丞を婿に取つて山脇の家督を相続するのである。

○一分 その身の分際の時、面目。

○恥を研く 恥を知つて男を研く。恥を知るは武士道の要素である、武士は名ををしむ。

○身上 身代。資産。

○境涯 境邊。

「新穀油掛町八百屋仁右衛門殿、生所遠州濱松、山脇氏」と書く所に奥よりけわしき足音す、南無三寶と懐ふ隠すとはいざ(※)白無垢に、尻ひとつからげ鉢巻しめ、手錠掻い込み十藏は、逸散に駈出るを半兵衛やがて駈塞がり、互に顔を見合せて、ハット驚くばかりなり、半兵衛は取纏り、死出立にてあはたたく、一興千萬何事」と、問はれて猶も氣を奇ち、「ヤア言わずとも知れた事、元來今日の口論も、元を糺せば此十藏、娘が事を先立て、彼奴めが妻に貰はんと、只管申越したれども、無骨者を知つたる故、再應使を受附けず、山名郡の代官、豊田新之丞と内縁を取結び、家督を立る鬱憤にて、思ひも寄らぬ汝にまで、恥を興へし其段は免してくれよ半兵衛、エ、さぞ無念口惜しかろ、見てゐる親を推量せい、即座に討つは知つたれども、汝に怪我のある時は養ひ親の言譯ない、それ故事を鎮めたり、半兵衛が一分を十藏立てやるべし」と、又飛出るを押止め、「おせきなされな待てたべ、私が名を下さじと、命に換えての親の慈悲、忝くは候へども心を静め御思案あれ、出合の詞争ひにも恥を研くは武家の事、町人の半兵衛が恥といふは駈落か、身上仕失ふたるか、これより外は叱られても、打たれても踏まれても、此境

○一分立 面目を立てること。

○手を廣げ 發展し。

○似はぬ 似合はぬ。

○侍冥利 侍が自誓の詞。侍の我が申すことが違つたなら、神佛の冥利に盡きることもあり、神佛かけて誓ひますとの義。冥利とは冥々の中に神佛の利益を享けること。この冥利又は冥加を其の人の身分或は職業の下に附けて、町人冥利、傾城冥加などと言つて、其の人の自誓の詞に用ひたものである。

○神以て 照覽まします神を誓に立てて以ての義で、自誓の詞。

涯の今の身に、一分立は候はず、然るに何の御生害思し止まり給はれ」と事を分けてぞ詫びにける、十藏は聞入れず、其方ばかりへ義理でない、大坂の養ひ親仁右衛門方へ聞へても、たま／＼國へ立歸り恥辱を取るにきよろりと、實父が脇見してゐるはよく／＼半兵衛悪事ぞと、疑はせては猶立たぬ爰を放せ」と詞の下、「ハアさりとは聞分けない、其仁右衛門も町人、國元へ行き手を廣げ、榮耀をしたと噂せば、悔み腹立あるべきが、喧嘩の場を穩便に濟ましたと聞かれたら、いか程か喜ばれん少しも氣遣い遊ばされな、御身の武士に引當て、世間の氣々も量られず、輕々しき生害はお年に似はぬ御短慮、殊に追附妹が家督定め候由、子孫の爲と思召し止まり給へ」と様々に、心を籠めてぞ諫めける、十藏つく／＼聞入てやう／＼打領きムウ思ひ廻せば一理あり、然らば生害止まらん」と持たる鎧を下に置き、悠々とこそ坐しにける、半兵衛は喜びて「御聞入忝し、とてももの事に御誓言承はらん」と根をおせば、「侍冥利大小かけ神以て偽りない、扱其方は言ふ如く、町人の氣になりぬいて、武士の恥は用ひぬな」、「ハテ扱あまり御念が入る、毛頭虚言仕らぬ」、「ム、然らば儘かな誓言誓言」、「ハア何が扱町人冥利

○小姓 貴人の側に給仕し、煙草盆・お茶・お手水など總て膝許の用を辨じるもので、年配十三四歳の者がこの役に多い。

○加増 秩祿加増。

○眉を開く 喜びに顔のかがやくをいふ。謡曲「鉢の木」に「常世は喜の眉を開きつ、」。

○相人 人相を見る人。

○殊なう 殊の外、格別に。

○出頭 身の其處に出で向ふこと。共に出頭してゐる人の意にいうた。

○無慚 罪を作つて心に慚ざる所なき義、轉じて不慚(ふびん)の意にいふ。

乞食こじきになる法もあれ、武士道は立てますまい、「イヤ町人の誓言は利慾に迷へば不ふ斷だんも立てる、汝に望む誓言は最前書た状箱、只一目見て安堵あんどせん、其誓言が望のぞみぞ」とせり立てられて半兵衛、ハットばかりにうろつくを、十藏やがて立寄りて懐中したる状箱を、引つたくれば詮方なく差さうつ、むいてぞ居たりける、十藏涙をはらはらと流し、汝が短氣を知りし故、襖の間より差覗さしぞき、最前よりの有様を一々残らず見届けし、二人の親の恩ばかり思ひ出して大殿の、御恩の程は忘れしよな、十二じふにの年より御前へ出で小姓數多ある中にも、勝かれて御不便ごびん加へられ其餘慶けいけいにて十藏も、武士の御加増頂戴し、喜悅きあつの眉を開きしに、長崎よりの客僧、賢藏主けんざうといふ相人、汝に刃の難ありと密かに殿へ傳へし由、殊ことなふ驚おどろき思召し、御前に人なき折節某を招き寄せ、しかくの御話天命とはいひながら、陣中の討死か忠義の爲に相果あいにば高名ともなるべきが、短慮たんりよの生れ出頭の、當言答め口論に討果あてさんは無慚むざんなり、町人にして一命を繋つなげとあるの重き御意、元より迷ふ親心何が扱我子の爲、畏り奉るとお受け申して其處此處と、尋ぬる内に縁あつて仁右衛門方へ契約し、お暇乞に汝をば召連れ出し其時の、亡君の御悦び今見る様に忝かたじけし、即ち

○藍鯨 青鯨をいふ。其の皮は刀劍の鞘を巻くに用ひられた。

○一腰 武士は大小を差せども、町人は刀一本を差すものなればかくいふ。

○天命知らず 天の我に命する所以のもの何なるかを知らずして、實行に務めぬをいふ。

○起請文 事を發起して神佛の照覽を請願する文書で、此の響に背くなら罰を蒙らうと請ひ奉る旨を記してある。この文は、起請文にもなる此文箱といふ意。

○瀧つ瀬 涙の晝しう流れ出るを瀧つ瀬に喩へて誇張した。そしてその縁語(瀧と浮き)とつづけた。袖が筏と浮くとは、洒落も過ぎて拙といふべきである。

○海 廣大なのを海に喩へている。廣大な思願にあづかつてゐることを、海の縁語を用ひて渡りしというた。

只今差してゐる、藍鯨の脇差をお膝許より取出し、長く武道の絆を切り、町家に住めば一腰は、命の親とも主君とも、敬ふても飽き足らず、刃は命を亡せども、助かるも又刃なり、軽々しく用ひなと御手づから賜はりしは、汝を守る寶劔なり、愛の深きは親なれども我子を君に差上ぐれば、忠義の爲に一命を惜しむなと教ゆるに、町人にして其方が安穩なれとの御憐み、親十倍の主君の恩それを忘れて短慮にも、討果さんとは何事ぞ、天命知らずの不忠者」と口説き立てぞ、泣にける、稍あつて涙を押へ、状箱をしつかと封じ、我印判を取出し閉目にひしと捺認め、半兵衛が前に据へう心を静めてよつく聞け、其脇差は君の魂、此印判は身が魂、書置開くは死後の事、それを閉ぢるは大切な命の門を固むる封印、堪忍の縮口を開くまじとの誓文にも、起請文にも此文箱、肌身を離さず懷中し是神明のお祓とも、守とも印文とも誓を立て忠孝を、思はば身をば顧みて、死んでくれるな半兵衛」と、心詞も瀧つ瀬に袖は、筏と浮きにける、半兵衛前後涙にくれ物をも言はず居たりしが、押直り聲を上げ、ハア淺ましや物體なや、主君の御恩親の慈悲養父孝の三つの海、渡り較べて數ふれば假令我身を百千に、碎きても飽き足らず

○丑三つ 午前二時半。

○しやんく 鈴の音の形容語であるが、これは「しやんぐく」とすべきであらう。近松作「丹波與作待夜のごむろぶし」中之巻に、「しやんぐく」と鈴鹿で描きかいてある。

○八つ 二時。こは午前二時。

○あぶつけ あぶみつけ（鐘附の義。驛馬の左右に小附とする小まき荷。

○後附 驛馬に客を乗せ、小荷物などを其の後方に結び附けること。

○蒲團張 客の座席用として蒲團を張ひあけること。「若みどり」巻四、おつづら馬の頭に「さても見事のお萬能馬よ、上にも懸敷き、唐織の蒲團、右圓張りして小姓衆を乗せて」。

第 二 (八軒屋の船著場)

登場人物の主な者

半兵衛 (大阪新穀油肆町八百屋仁右衛門の養子、三十八歳) 與次兵衛 (旅宿業三笠屋の亭主)

お千代の伯母・船頭・遊女屋の亭主等

お千代 (半兵衛の妻、二十四歳)

生あればこそ骨に染み、胸に通りし御意見を何しに餘所になし申さんふつ、と心を取直し武道は口にも出すまじ、通り入て候」と手をつかへてぞ詫びにける、十藏につこと打笑みて「出来したり満足せり、いよ／＼相違あるまいな」、「ハア何が扱翻へさぬ」、「ヲ、嬉しや落著いた、是もおぬしが可愛さ」と、又打解けし涙なり、はや丑三つの鐘の音に續くしやんく馬の鈴、門外に聲高く、「サア旦那殿八つが鳴る」、あぶつけ後附蒲團張り、「早う／＼」と呼び立れば、半兵衛ハット立上り「時刻に及ぶ御暇」、「ヲ、ヲ、無事で」、「御堅固で」、「是程目出度い別れはない、さらりと笑ふて」と、顔見合するにつこりも後の、名残となりける

梗概

八百屋半兵衛は濱松から歸る途中、大阪通ひの船に乗つて八軒屋に著いた。船頭「サア船が著いた。お客様忘れ物がないやうにして上らつしやれ」といふ。折から三笠屋の亭主與次兵衛は、我が家に泊つてゐる客の頼みを受け、酈落した島原の遊女を尋ね来て、派手な姿の年頃の女と老婆と二人連れが、他の乗合船から上つたのに目を附け、「酈落者は大方あれぢやの。追手の衆こちへござれい」と、聲を掛けて追取卷いた。

半兵衛は何事かと立寄り、小提灯を掲げて取巻かれてゐる女の姿を見、「ヤア女房か」。お千代「あら半兵衛様」。半兵衛「伯母様もお出でかさて」と、三人水入らずに見えたので、與次兵衛は側に立つて胡散げに様子眺める。半兵衛「これ貴方は何をじろく見さつしやる。定めし人違ひなさつてゐる。これは拙者が女房でござる」。與次兵衛「扱はさやうか、町方のお内儀にしては意氣な風。御夫婦なら御一處でありそなもの。いやこれは御粗相申した」と、疑ひの晴れぬやうな詞を残して去つた。半兵衛は伯母やお千代から、己が留守中にお千代が姑に離縁を迫られた事を聞いて驚き、自分は決して左様な意思の無い事を述べて之を宥めた。伯母はなほも疑ひ、お千代の姑が書いた去狀を出して半兵衛に見せた。そしてお千代の母親が京で貧困してゐる様を述べ、お千代を實家に引取る事ができない爲、奉公に出さうと思ひ、今下阪した事などを語る。

半兵衛は伯母の言を聽入つて身を動かす拍子に、懐から狀箱がころけ落ちた。伯母は其の狀箱の上書に「八百屋仁右衛門様山脇半兵衛」とあるのを見て、急いで之を拾ひ、「そのやうに文通してゐるからは、お千代の離縁に就いても姑と合意であらう」として、狀箱の封を切らうとする。半兵衛「いや待つて下され。其の狀箱の中には實父の意見が書いてある。其の封を切られてはなりませぬ」と奪ひ取る。そこでお千代は夫の心を疑つて、恨めしげに身をまがく拍子に、袂から一通の文を落した。半兵衛ちやくと之を取上げ、お千代が取戻さうとするを突退け、「この文は怪しい。母が離縁した譯も知れるであらう。不貞腐れめしな」と、罵つて封を切り、文をひろげて讀上ければ、夫との思ひがけぬ離別を嘆いて不遇を悲しみ、身を淵川に沈めようとする覺

悟を細々と記してある。伯母はこれを聞いて泣き出し、「お千代よ、必ず死んでたもるなよ」と懇ろに諭した。半兵衛も涙にくれ、「この状箱を疑うてくれるな。己も故あつて故朋輩李之進を斬棄てて自害しようとし、その時認めた書置を、實父が之に入れて封じたものである。今日から五日の中にお千代を呼戻すやうにする。伯母様それ迄どうぞお千代を預かつて下され」と約束した。

かくてお千代を駕籠に乗せて去らうとする。折節、與次兵衛は遊女屋の亭主等を誘つて跡戻りし、お千代の乗れる駕籠を取圍み、半兵衛の言譯するを聞入れず、駕籠の簾を上げてお千代を見、「ハアこれは人違ひぢや」と、皆共きまり悪く揉手をして、駄酒落まじりに詫びながら逃去る。

評

お千代は性質温順で、容貌も美しう生まれながら、姑にいちめられて衰れな運命を辿らねばならぬ。讀者の同情はそこに引附けられるであらう。

半兵衛は姑の邪険な心を既に知つてゐる筈である。それだのにお千代が落した文を見咎めて、直ちにお千代に密夫がある如く察し、「去られた様子が知れかゝる」と罵つた。さやうな者では到底圓滿には治まらぬ。作者は夫婦の情を述べるに、理に偏して餘りに淺薄である。

○軒較ぶる鐘の聲 研の響ミ八つ時を報じる鐘の聲と、いづれが大きいかを較ぶる意。以て、人聲静まり、研聲深夜の寂寞を破つてよく響くをいふ。

○八軒屋 大阪天神橋南詰から天神橋南詰に至る間にある露邊で、京伏見通ひの船乗り場。

第二

難波津や、賑ふ門も小夜更けて、軒較ぶる鐘の聲、數は幾つぞ八軒屋、海士の

この文は、八軒屋に八つ時(午前二時)をいひかけた。

○漁と 漁火の如く。

○しんく 沈々。

○煽つ 扇を揮う(う)つの韻義か。吹き動かす。

○上 上方(かみ)がた。京都をさす。

○墮落者 悪事をして行方をくらまし逃げ去る者。

○嶋原の色 京都島原遊廓の遊女。

○類船 同類の船。共に連れ立つ船。

○女中 婦人。

○ぼつとり 婉美柔和にして、ふくふしいさま。安原貞雲撰「かた言」に「ぼつとり日やほらかにいとほしき形か」。近松作「骨根崎心中」に「戀知りの初様とて、町一番のぼつとり者」。

○苦漏る露：雑袖 舟の苦から漏る夜露も情を知つて、女の雑袖に降りかかる意と、涙に雑袖を濡らして、縁故の人に靡く意とをいひかけた。

○雑袖 袖口の下が建刃なりになつてゐる袖をいひ、所謂元雑袖である。「靡く雑袖」は、同じ頭音を重ねた所謂頭韻法。

○小袂 衣服の袷(あし)さき。この文は、小袂に戀をふくませてゐるを抱帯にいひかけた。

○抱帯 婦人のしごき帯をいふ。衣服をから伊上(いさ)けて纏ふにより、手で抱へてゐるやうな形になるから抱帯といふ。

○荒れし軒端：如くなり 姿を荒れし軒端

漁と掲げたる、宿の行燈しんくくと、濱風煽つ上り場に、遠近人の下り舟、押並

んでぞ舉り寄る、船頭眠りを呼覚まし「サア」著いたぞ上らしやれ、置忘れの

無い様に、諸事改めて」といふ所へ、泊り宿の亭主、三笠屋與次兵衛出來り「待

つた」船頭衆、改める事がある、宵の内から我方に上の衆じやが二三三人、駈落

者のお尋ね、嶋原の色じやげな、残らず舟を吟味して頼む」と弄げば、船頭

ども聲々に、類頭の内やうくと女中は二人ばかり、一人は内儀様一人は若い

ぼつとり様、それく其處へ上らる、勝手次第に穿鑿」とざはめく内にしとし

とと、苦漏る露も情知る、ゆかりに靡く雑袖や、小袂に色を抱帯はでな姿の女房

に、婆の連立つ其風情、荒れし軒端に三日月の、光こぼる、如くなり、與次兵衛

立寄り提灯の、影に見るより打領き「うハ、ア大方これ臭い者、ぬく」と駈落じ

やの、追手の衆が此方にじやいざ御座れい」とせる所へ、次の舟より半兵衛は遠

州よりの歸り足、何心なく上り場に男女のわめく聲、立寄りて小提灯「ヤア女房

に、はでな姿の女房を三日月に喰へたのであるが、うまくない喰

である。このあたりは隣分文を備つてゐるが、到底近松の妙文に

敵すべくもない。

○影に見るより 火影に兩女の姿を見るより。
○ぬくくと づうくとしく、うまくと。
○此方にぢや 此方にゐるから、二人の女ども。

○餘儀なく、外ほかの儀なく。ここの文は、半兵衛といひ、女房といひ伯母といひ、見かけた所その通りで別儀ないとの意。

○胡散 疑ひ怪しむこと。支那の小説に胡散とある語が我が常用語となつたので、廣東音を傳へたのであらう。

○ばつと 寛濶なさまをいふ。

○かうと 「こうたう(公道)の約説であらう。じみ。著實。俳言集覽に「公道」おとしきとほ物の公道なる心なほ、花やかならぬをいふなるべし。お千代ははで、美、好きであるから、伊達賢關に裝へども、人妻であるから、こゝこなく所帯染みた所がある。そこで「はつとかうとな御風俗」と評したのであらう。

○亭 亭主の略。

○はれやれ 「はれ」も「やれ」も感動詞。やれまあ。近松作「丹波與作待夜のこむろぶし」上之巻に「はれやれ、はれやれ、はれやれ、馬やうい。

○悪銀 銅を多量に混合した悪質の銀貨。

○せき立つて お千代がせき立つのである。

○おぢや おいでやれ。

○しら／＼しい 知つて居ながら知らぬ振なるをいふ。しら／＼つくれる。

○とぼけだふれ とぼけられて、やうにもならず立ち行かぬこと。

○かたむくろ 片むき。片意地。かたくな。近松作「心出天の綱繩」に「かたむくろの覆父殿疑の念なきやうに覽紙着すが合點か」。

か、「半兵衛殿」、「これ伯母様扱々」と、互に餘儀なく見へければ、與次兵衛は猶胡散げに、控へて様子を窺ひける。半兵衛はしとやかに「どなたかは存せねども、誰も心のせく時は人違はあるもの、正しく是は身が女房外をお尋ねなされい」と、言へども與次兵衛食はぬ顔、扱は左様か如何様にも、町方のお内儀にはばつとかうとな御風俗、御亭様なら一連かと、思へばさうでもありそむないはれやれ御庵相申した」と、詞を殘し歸りける、半兵衛打笑ひ「庵相者と悪銀は、いかさま世間に多いもの、して先づお千代伯母様と、何故の上のぼり、お袋様は御無事なかどうじや様子が聞たい」と、詞の内よりせき立てお千代はやがて取附くを、伯母は駈寄り引放し「エ、未練な、何にも言やる事はない、こつちへおぢや」と手を取るを、半兵衛とどめて興醒顔、「伯母御はいかふ不機嫌なが、女房に恨か身に當りか、何とも合點の行かぬ事お千代どうじや」と尋ねれば、伯母はいよいよ氣を悶へ、扱しらく／＼しい空とぼけ、それにはまつてお千代はの、とぼけ倒れになりました、はあこれも言ふまいさあ来い」と、急ぎ立れば半兵衛は、なほも向ふに立隔て、それは餘りにかたむくろ、疑ひ紛ひもある習ひ、善惡共にいつま

○問はぬもつらし：知ろし召されぬ事ならば、類みとしてゐる我が夫の、我を問うて下さぬも辛い。又問うて下さるにつけても、我を心に懸けてゐても、御存じない事であるならの意。「伊勢物語」の歌に「武藏鑑さすがかけて頼むには、問はぬも辛い問ふもうるさし」とあるに據つた。

○武藏鑑 昔武藏から産出した鑑で、名物である。武藏鑑は馬の左右の腹にかけけるもの故に「かけてたに」といふ爲の序詞である。

○たへ 給へ。

○姑去り 姑に離縁をされること。

○掛かつて 寄り掛かり養はれて。

○淀まぬ水 船といふを受けて其の縁語につづけたので、悉思疎通の意にいふ。

○男の心は川の瀬に譬へ 諺に「男の心と川の瀬は一夜變り」といふ。この諺は「毛吹車」にも出である。

○母様 京都にゐるお千代の實母をさす。

○一つ辛さぞと 一つになつて辛い事をする者ぞと。

○怪顛 心が顛倒する程驚き怪しむこと。

○仕覺 才覺の仕方。この語は獨立しても用ひるが、思案仕覺と同じ類語を重ねて用ひる場合が多い。

でも様子を聞かん」と奇ちける。お千代涙の下よりも、「問はぬもつらし問ふも亦、武藏鑑のかけてたに、知ろし召されぬ事ならば、聞いて憐れをかけたべ、お留守の内に思はずも、姑去りの力なく、爲やう事なさにすごとくと里へ戻りて母様の、朝な夕なの煙さへ立かね給ふ其中に、四五日かゝつてゐる内に、此伯母様が京参り、立寄り給ふを幸ひに行方定めぬ下り船、淀まぬ水の縁にて、相見る顔は變らねど、變るは今の我身の上、男の心は川の瀬に譬へあれど自らは、飽かれた仲とは思はねど、母様や此伯母様は、お前も一つ辛さぞと恨みて今のすねこと言譯をして給はれ」と口説き、歎くぞ道理なる、半兵衛ハツト怪顛して、騒ぐ心を押鎮め「歎くは道理さりながら、不慮に此處にて出逢ふが夫婦の縁の切れぬ故、思案仕覺もあるべきぞ氣遣いすな」と言ひ宥め、これ伯母御、お腹立は聞へたが身どもへ當りは不料簡、當月初めつ方よりも参宮致し直ぐ様に國元へ罷り越し逗留は只三日、其外は皆旅の空狀通致さん様もなし、留守の間の言ひ事を半兵衛も一處とは、廻り過たるお疑ひ、機嫌直して此上の相談あれ」と詫びければ、「ナウあてどのない事恨めうか、貴方と豫て相談の慥なしるしは見やしやれ、姑

○歴々 身分格式などの貴く高い人。

○縁はきたないもの 縁は理をくらし、情にひかれて難れ難い意の語。「きたない」は法にかたないの義であらう。「貞女骨氣」卷六に「何とも思はざる男、それも一日暮しにいっしか疎略に思はず、一代大婦になりすまたぐひ世に多し、これらを思へば縁はきたなきもの」といふ俗語尤もぞかし。

○さがなうて 性さが無うての義。不良であつて。

○陰日向になる 色々に心を配つて人を庇護するをいふ。「義経千本櫻」第一の初に「陰になり日向に成り、言ひくろむれども御前には謀者の舌は強くなり。」

○人あひ 人間。ひとづき。近松作「心中切は永の朔日に」馳走しやや人あひよく。

○ちつとの落目は派手なれど 華美好きが少しの弱點なれども。

○花の盛り 若盛りの時。妙齡の頃。

○三界 界隈。あたり。三界は多く名詞と複合語となつて用ひる。即ち「親許三界」「江戸三界」「京三界」「那覇三界」などいふ。また助詞「の」を挿みて「縁崎の三界」などいふ。この語も佛語「三界」の轉義であらう。

○たくりかけ 手練掛である。くりかけくりかけする。續けざまにいひかける。

御の直筆、お千代をば去状、夫婦の仲の退き去りは誠の親でも我儘に、さつぱりとはならぬもの、腹貸さぬお袋が心一つで書かれうか、是でも物が言わるゝか」と、半兵衛に投附ければ、不審ながら取上げてつく／＼見れば暇の状、是とはばかり差俯向き二度、呆れて見へにける、伯母は恨みの詞さへ胸に餘りて目に涙、

「聞へぬぞや半兵衛殿、貴方は元が由ある身仁右衛門殿も歴々、千代が一家は吹けば散る、こちと風情は疎まれても元より縁はきたないもの、女房さへかはゆくば其處に隔てはあらぬ筈、姑御のさがなふて取りにくい御機嫌に、辛抱するは何ぞ男の顔を樂しみに、暮す女房に口出して鬚屑こそなるまいけれ、陰日向になる程の氣骨は折てやられても、さのみ人は叱るまい、言ふではないが可愛そに物も見事縫いまする、書出し一つする程の目は親達か明けて置く、紡績なら人あいなら、器量は貴方の覺てなり、ちつとの落目は派手なれど若い時が二度は無いさのみ無理にもあらぬ筈、花の盛を狼狽へて京の親許三界へ、行ても居られぬ貧しさを見合ふても濟ぬ故、身の片附を奉公と思ひ定めて連れて來た、さぞ本望でござろう」と、たくりかけ／＼口説き、啣つぞ道理なる、半兵衛始終を聞入て「成

○神以て 自誓の詞。(既出)

○さがなく 性無。性弱く。良くなく。

○胸愆 じんよく(貪慾)の軛。非道。無慈悲。

○隔し中 「隔てし中の諷であらう。肉親ならぬ間柄、即ち養母と養子との關係をいうたのである。

○抜き 目を抜き。人目をくらし。

○はちげん はつげん(發言)の釋。「はちげん放つ」は言ひ放つを強めていへる言葉である。近松作「持統天皇御法」に「甲が舍利にならざるも親王を助け奉るも、はち言放つていひければ」。

程一通り、かう見た所は私に恨みは道理さりながら、神以て存せぬ段、いか様の儀も致さん」と、立寄る拍子に懷中より、狀箱の落ちけるを伯母は取上げつくく見て、宛名は八百屋仁右衛門様山脇氏半兵衛とは貴方の事ではござらぬか、狀通は致さぬとぬけくと能う言わしやるのふ、定めしお千代が事であるどのよな惨い談合ぞ、封切て見まじよわい、「否々そうした物でない、此方へ遣はされい」、「ハテ紛れない隠すまい、讀んでなりとも腹癒ん」と既に封印切かかれ、半兵衛周章でもぎ放し箱を明くれば忽ちに、疑ひは晴るれども親の意見の命の封、切るに切られぬ恩愛の深きに代へてさがなくも、養ひ母の胸愆さ思ひ廻せどさすが又、隔し中と義を立て口には出さぬ品々の、恨みはせめて目に漏る、涙に晴らすばかりなり、お千代はくわつとせき上げて、「欺しやつたの抜きやつたの、其心とは知らずして母様や伯母様の、恨み誹りを言ひ有め半兵衛殿はいとしげに、さもしい心はござらぬとはちげん放つて今更に、面目ない恥かしい恨めしの男や」と、肩に食ひ付き膝に寄り身を悶ゆれば袂より一通の文落散つたり、半兵衛ちやくと取上ぐれば其手に取付き嚙附きて、「大事の物じや戻してたべ見せては悪い」

○いかつい 殿(い)めしい。「殿(い)か」つい
運禮(うんれい)とは、殿(い)めしい事をいはれた其の返禮(へんれい)。

○天山(あまのま) 天または山の如く高き思を蒙れること。

『手家物語(ていけものがたり)卷四、源氏法(げんじほう)三(ろ)へ』の條に「洪増(こうぞう)は平家の御恩(ごおん)を天山(あまのま)に蕪(う)りたれば、いかでか飯(い)き奉るべき」。

○一度(いちど)の詞(ことば)も荒(あ)し申(ま)さぬ 夫婦(ふうふ)互(たが)いに一度も荒(あ)い詞(ことば)をつかひ申(ま)さぬ。

○高麗橋(こうらいばし) 大阪市東區にある町名。

○石町(いしまち) 大阪市東區にある町名。

○宿(しゆく)りし 懐胎(わいたい)した。

○分(わ)く方もなき 思(おも)ひわけもつかぬ。

○かしく 「あなかし」この略稱。恐縮(おそそく)の意であつて、婦人(ふじん)の容狀(ようじやう)の末(すえ)に用(もち)ひて敬意(けいぎ)を表(あらわ)す語(ことば)である。

と周章(しゅうしやう)てしを、取(と)つて突返(つきの)け睨(にら)みつけ、「去(し)られた様子(ようす)が知(し)れかゝる、物體(ぶつたい)なくも母人(はは)を邪險(じあけん)な心(こゝろ)と恨(うら)みしが、却(か)つて慈悲(じい)であつたよな、暇(ひま)を取(と)り取(と)つたれども不慮(ふりよ)に遇(あ)はての間に合口(あひぐち)、間男(まをとこ)の出合(であ)ひ宿(やど)、伯母(おは)御(ご)のいかつい返禮(へんれい)に、痴話(ちわ)文讀(ぶんどく)んで聞(き)かさん」と、封押(ふうおし)切(き)つて線開(せんあ)けは、コハいかに最期(さいご)の一通(いっとう)、ハット思(おも)へど心(こゝろ)を鎮(しず)めて讀(よ)み上(あ)ぐる、形見(かたみ)ながらに書置(かきお)きの事(こと)、一我(ひと)身(み)抽(ひ)かして半兵衛(はんべゑ)殿(だん)と夫婦(ふうふ)になり申(ま)す上(うへ)は、お二人(ふたり)様(さま)をば誠(まこと)の親(おや)より大(お)切(き)に思(おも)ひまゐらせ候(こう)、されども足(た)らはぬ心(こゝろ)からお氣(き)に入(い)らぬのみならんに、今迄(いま)の御憐(おは)れみ、天山(あまのま)忝(かたじけ)なく思(おも)ひまゐらせ候(こう)、一夫(ひと)婦(ふ)となり申(ま)してより、遂(つい)に一度(いちど)の詞(ことば)も荒(あ)し申(ま)さぬ中に、思(おも)ひも寄(よ)らぬ別(わか)れを致(いた)し候(こう)事(こと)よくの縁(えん)の切目(きりめ)と悲(かな)しき事(こと)に候(こう)、一高麗(ひと)橋(はし)の伯母(おは)様(さま)も、歸(かへ)り候(こう)事(こと)も恥(は)かしく石町(いしまち)の伯母(おは)様(さま)、京(きやう)の母(はは)様(さま)いづれも貧(ひ)しき暮(く)りに候(こう)へば、身(み)を寄(よ)せ候(こう)事(こと)も痛(いた)わしく候(こう)、かれこれ思(おも)ひに迫(せま)り命(いのち)の際(きわ)になり申(ま)し候(こう)、残(のこ)り多(おほ)きは盡(つ)きせぬ仲(な)ち、取(と)り分(わ)けかはゆきは宿(しゆく)りし我(わが)子(こ)、共(とも)に消(き)え失(う)せ候(こう)事(こと)分(わ)く方もなきこの身(み)の因果(いんぐわ)も、夢(ゆめ)の世(よ)の中(なか)とは申(ま)しながら、又(また)改(か)めて夢(ゆめ)のやうに、却(か)すゝもはかなく思(おも)ひまゐらせ候(こう)かしく、ハットばかりに讀(よ)み終(は)り、三人(さんにん)共(とも)に差俯(さしうつ)向き聲(こゑ)も立(た)てず泣(な)き沈(しず)む、お千

○二瀬川：涙なる 恨みと戀との爲に、涙が二筋に流れるを二瀬川といひなし、涙のわき出るを汐が二瀬川に満ち来るに喩へた文飾である。
 ○しほらし 正しくは「しをらし」である。可憐なり。いたはしい。

○過分 分に過ぎた扱ひの義。身に餘つて羨いこと。

代やうく顔を上げ、とやかふ思ひ直しても、夫に離れ長らへてあらぬ命と覺悟して、此世の名残り母様にお目に懸つて其後は、身を淵川に沈めんと思ひ詰めに伯母様に、逢ふての後は折もなく、今迄長らへ候ふぞや此世の縁は薄くとも、未來で長く添ふべしと、楽しみにした我身をば、惨い」とばかり半兵衛を、じつと見やりし目の内に、恨と戀の二瀬川満ちくる汐ぞ涙なる、伯母は思はず聲を上げ、「ア、しほらしの心やな、世には去られた夫への、面當のまた意地のとて、つい縁附くもあるに扱、命を捨て先の世を頼むと迄は古の、嫁鑑にも勝るべし、さりながらとつくりと合點をして見てたも、そなた一人を親伯母が、頼み切たる杖柱男へばかり道立て、二人に孝は無いか嫁入らさふともいふまいし、奉公さしよとも申すまい如何なる貧苦を凌いでも、健全な顔見りや嬉しいぞや、必らず死んでたもるな」と歎き侘ぶるぞせつなけれ、半兵衛涙押拭ひ、思ひ詰めたる志満足せり過分なり、何を隠さん某も國許で口論し、打果さんと思ひ詰めはや書置まで認めしを、親十藏の御意見にて命を繋ぐ封印を此状箱に捺されし故、深き疑ひ受けながら開く事なり難し、半兵衛が書置は父が見附けて命を延ぶ、今又そな

○吉相 吉兆。

○同行 佛法を信じて行を同じうする者。同行者の縁によつた語である。第三に、仁右衛門の同行衆が、仁右衛門方に來て、お千代を辱罵すやうに酷く伏線である。

○いつまで草 いつまでも生えてゐられぬだらう草の縁で、壁に生える草の泛稱であるといふ。枕草紙卷三、三十三段に「いつまで草は生ふる所」とはかなくおはれはなり。

○つり詞 約り詞。あざむき誘ふ詞。ここの文意は、いつまで草の如くはかなくて信用しかね、人の心をつりたます詞ではないかと思はれるといふのである。

○なしに ない内に。

○せつはして 結開きして。談判して。近松作「五十年忌歌念佛上之巻に、「非刻にから切羽辯ははきする通り、金渡したら御扱であらう」。

○外に附けし値打 駕籠の外に附随する、駕籠賃の價を附けたまをいひかけ。

○坂東聲、實盛 「ほんごうしに坂東聲をいひかけた。「ほんごうしは、駕籠昇などの浮世語であつて、八、いふ。即ち八文である。坂東聲とは、半兵衛が遠州松原の生れであるから其の聲をかくいうた。そして實際實盛が坂東聲であつたといふ故事によつて、「坂東聲實盛なり」としやれたのである。講曲「實盛」にも、「名乗れよと責むれども終に名乗らず、聲は坂東聲にて候と申す、木分殿、天晴れ長井の齋

たの書置を半兵衛が見て助くるも、行末目出度い吉相なり、町衆又は同行申たとき廻して近日に、再び内ゑ呼戻さん伯母御お千代を暫しの内、貴方へお預け申したい、ム、口では見事捌けれど、いつまで草のつり詞、合點が行かぬ」とかぶり振る、半兵衛は思案して、然らば今より日を切て五日が内にさつはりと、お千代を内ゑ呼入れん、それ迄のお情を料簡あれ」と手を摩れば、伯母もやう／＼聞入て「そうさへなれば互のため、若しも五日が過たらば貴方の内ゑ持込むぞや」、「それ迄なしにせつはして、手廣ふ迎いにやりまする」、「違いはないの」、「誓文」と、互に堅めゐる折節、「駕籠やりませふ駕籠遣ろい、遣りましよい」とぞいひかける、幸ひ東も白んだり人目を忍ぶ夫婦づれ、千代をば乗せて駕籠の外に、附けし値打も坂東聲、實盛なりと人や見ん、かゝる所へ與次兵衛が、噂に寄りし亡八の者はた／＼と駈來り、「此駕籠なは紛れ者ソレ引出せ」との、しれば、半兵衛駈隔て、「近頃無體千萬、此内は身が女房、荒氣を出さずと通られ」とことわり言へど聞入す、「お内儀様拜みたい」とばれか、れば、「ヲ、女房の開帳なら、まづ三百目持つて來い」、「ヤア偽るまいぬかすまい、それ見よ」と駈寄るを、「ならぬ」

たの書置を半兵衛が見て助くるも、行末目出度い吉相なり、町衆又は同行申たとき廻して近日に、再び内ゑ呼戻さん伯母御お千代を暫しの内、貴方へお預け申したい、ム、口では見事捌けれど、いつまで草のつり詞、合點が行かぬ」とかぶり振る、半兵衛は思案して、然らば今より日を切て五日が内にさつはりと、お千代を内ゑ呼入れん、それ迄のお情を料簡あれ」と手を摩れば、伯母もやう／＼聞入て「そうさへなれば互のため、若しも五日が過たらば貴方の内ゑ持込むぞや」、「それ迄なしにせつはして、手廣ふ迎いにやりまする」、「違いはないの」、「誓文」と、互に堅めゐる折節、「駕籠やりませふ駕籠遣ろい、遣りましよい」とぞいひかける、幸ひ東も白んだり人目を忍ぶ夫婦づれ、千代をば乗せて駕籠の外に、附けし値打も坂東聲、實盛なりと人や見ん、かゝる所へ與次兵衛が、噂に寄りし亡八の者はた／＼と駈來り、「此駕籠なは紛れ者ソレ引出せ」との、しれば、半兵衛駈隔て、「近頃無體千萬、此内は身が女房、荒氣を出さずと通られ」とことわり言へど聞入す、「お内儀様拜みたい」とばれか、れば、「ヲ、女房の開帳なら、まづ三百目持つて來い」、「ヤア偽るまいぬかすまい、それ見よ」と駈寄るを、「ならぬ」

藤別當實盛にてやあるらん」とある。

◎くつわ 遊女屋の主人をいふ。くつわを亡八と書くは、遊里では仁義禮智忠信孝悌の八徳を亡「うしな」ふからであるといふ。

○ばれ あほき。「櫻洲笑」に「はれ」俗語に事ははれたなぞいふは破産の輕訛なりといへり、露顯の意にいふも同じ。

○三百目 閉男の過科三百目を取られるといふ語をかきかしてかきかいた。「亂經三本鑑」六之卷に、「東大阪の閉男さへ三百目ぞかし。」「世間詞算用卷一、長刀は昔の鞘の後に、「これを世にいふさばり三百なるべし」。

○傘の御用に立ちまじしよ 上位の遊女の道中に、後方から傘をさしかけて行く者がある。其の傘をさしかける者ならうと、くつわの者がいふのである。いかにも彼等にふさはしい謙謙である。遊女の後方から傘をさしかけてゐる例は、「圓光大師傳」の中の圖にも見え、元祿以後近頃までもその例がある。

第三 (半兵衛内。道行星の) 數。大佛殿勸進所)

登場人物の主な者

嘉兵衛

衛(仁右衛門の甥。仁右衛門の内に寄食す)

利介

介(半兵衛方の手代)

仁右衛門

衛(八百屋。半兵衛の養父)

心中二つ腹帯

七九三

と支へて入亂れ彼方へ押合ひ此方へくづれ、暫し捻ぢ合ふ其際に、一人外して籠を明け、提灯掲げびつくりと、「こりや違ふた」と飛退けば、皆一同に首尾悪く搦手をして腰かざめ、く、く、結構なお内儀様、是をついでにお近附き、傘の御用に立まじしよ」と言ひ捨てこそ逃げにけれ、半兵衛怒り押鎮め、本意なれども親よりの意見の状箱押戴き、「堪忍するが町人風、女房は又當世風世間の人が誹らふが、母者がくすべうが、此はつとした條を、我等が宿のお千代じや」と打連れ、てこそ 歸りける

○母者人 おのれの母を呼ぶ詞。母を母者人、姉を姉者人、兄を見者人などいふ。この詞は封建時代に武士の間に行はれたが、町人の間にも往々用ひられた。も「母ぢや人」であるが、

古くから「母ぢや人」「母者人」等いてある。
○燻べる いやみなん言うて人の氣をくさらせる。
○ばつと (既出)

仁右衛門の妻(惡婆)

太郎兵衛(仁右衛門の
同行仲間)

半兵衛(八百屋仁右衛門の)
五右衛門(仁右衛門の
同行仲間)

お千代(半兵衛の妻)
七兵衛(仁右衛門の
同行仲間)

梗概

八百屋半兵衛は、庚申様に參るとて、四月五日(享保六年)の晝間から外出し、暮になつてもまだ歸らぬ。仁右衛門の甥の嘉兵衛は燈火の許で、手代の利介と共に商ひの勘定をしてゐる。其處へ仁右衛門夫婦が出て來て、仁右衛門は優しく嘉兵衛に言葉をかけ、「近頃は能く商賣に精を出すやうになつてくれた」と褒める。仁右衛門の妻は不機嫌な聲で、「半兵衛の歸りが遅いのは、お千代が石町の伯母の處にゐるから、嘸それに逢ひに行つたのであらう」とどくつく。仁右衛門は妻を宥めながら、共に連立つて同行仲間の處へ出掛ける。

半兵衛は、四月五日には急度お千代を我が家に引戻すと、お千代やお千代の伯母に約束したのであつたが、其の五日が來ても、姑がお千代を惡む心が和らぐ爲に、戻す事もならず、憂苦に沈んで世をはかなみ、いつそお千代と共に死なうと決心し、せめて我が家から、夫婦手を取つて門出したく思ひ、お千代を連れて我が門口まで歸り、内の様子を窺ふ。

内では嘉兵衛と利介とが留守居し、半兵衛夫婦に同情して姑の悪心を罵り合つてゐる。之を立聞きしたお千代は、泣いて夫に早く死にたいと迫る。半兵衛は之を慰めながら暗がりに隠れさせて内に入り、嘉兵衛・利介を外出させてからお千代を引入れようと思ひ、「ヤア今歸つた。今日は宵庚申でお参りしたが、大變な参詣者で動きが取れなかつたので遅うなつた。お前たちも早く参つて來い」と勧めた。利介はそれを聞いてすぐに驅出たが、嘉兵衛は出掛けようとしなない。そこで半兵衛は嘉兵衛に用事を言附け、外出させてお千代を内に引入れた。

お千代は長く住み馴れた家を懐かしがり、舅が自分を可愛がつてくれた恩を思ひ出して悲歎にくれる。半兵衛も亦舅の恩を謝して泣く。苦勞人の嘉兵衛は、半兵衛夫婦が死なうとする心を察したので、赤毛氈を入れた風呂敷包を携へ、急いで家に歸る。

其の足音に半兵衛は驚いて、千代を押入に隠せば、嘉兵衛は座に上がつて押入を明けようとする。半兵衛は之を制止して、誂へ客からの用向を尋ねる。嘉兵衛は「押入を明けさせぬとは、どういふ譯でござる」と不審がりながら、注文を受けた駄立を讀上げる。其の言葉の中に、半兵衛夫婦が情死しようと思へる事を諷刺し、「なぜ私に打明けて下さらぬか」と恨む。半兵衛は嘉兵衛の優しい情を感謝し、お千代を引出して嘉兵衛に禮を述べさせた。そして「お千代を伯母の處へ連れて行く」と賺して、お千代と共に出る。嘉兵衛これを呼留め、「駕籠の中の敷物に之を差上げる」とて、赤毛氈を渡す。

この時仁右衛門夫婦は、同行仲間三人と共に歸つたので、半兵衛はあわててお千代を小櫃の陰に隠す。同行仲間は既に半兵衛から執成を頼まれてゐるので、半兵衛夫婦の爲に交々言葉を盡して老夫婦に意見をする。柔順な仁右衛門は、すぐに同行仲間の意見に従ひ、相共に諭して妻の心を和らげようとした。然るに妻は、お千代が伊達者であるに難癖をつけ、「あの嫁では世帯が持てませぬ」と辯じ立て、「お千代を離縁せぬのなら、私は尼になる」と言ひ放つ。そこで仁右衛門は、心ならずも之までと諦め、「これ嘉兵衛、嫁を離縁するのは、其方に家督を譲る爲ぢやと、世間の人々に思はれては自分の面目が立たぬ。其方も出て行け」と言ひ渡す。嘉兵衛は平然として、「承知しました。明日からは乞食となり、姑御の寺参りの行戻りを附廻しませう」と、言ひ放つて出ようとする。半兵衛之を呼留め、「お千代は自分が離別した。すれば嘉兵衛は出て行くに及ばぬ事。同行衆様よ、親仁様に嘉兵衛の詫言を頼みます」といひ、同行衆は思ひ掛けない嘉兵衛の仲裁者となる。嘉兵衛「然らば方々のお言葉に従ひますが、何だ折角家出しようとしたに詰らない」と、皮肉をいひ、同行仲間は苦笑して歸り、姑は奥に入る。仁右衛門は半兵衛を憐れみ、「酒は愛ひを忘れるといへば、一つ飲んで寝よ」とて、悄然として奥へ行く。

お千代はそつと小櫃の陰から這出て、半兵衛と共に舅の後影を拜む。嘉兵衛は半兵衛が情死を思ひ止まつたものと思ひ、お千代を伯母の處に送らす爲に、潜戸を明けて半兵衛夫婦を出す。半兵衛夫婦は涙にくれながら、これがこの世の見納めと名残を惜み、赤毛氈を被つて闇の中に消える。

〔道行星の數〕 半兵衛は赤毛氈を肩に掛け、お千代を連れて津村の堤を過ぎる。空にきらめく數多の星を仰いで感慨を述べ、寺町を通りて重願寺を拜み、生玉馬場先なる大佛殿勸進所に著いた。

此處を死場と定め、赤毛氈を敷いて夫婦その上に坐し、暫し思ひ出を語り合つて歎いた。半兵衛は心を取直し、「親の前で離別を言ひ渡したのは、孝の道を立てる爲であつた。然しお前の親里は貧しい暮し、往處のないお前を去るは義でなく、共に死ねば夫の道が立つ」と、諦めては言へども涙にくれ、濱松の父や養父の愁歎を祭し、「どうぞ先立つ罪を赦して下さい」と悲しむ。

お千代も「かつて母様に孝行したことなく、刃に死んで歎きをかけ、今後どうしてお暮しなさるや」と、掌を合はせて泣入る。半兵衛「互にいつまで言うても同じ事。夜の明けぬ中に心靜かに最期を遂げよう」とて、西に向つて念佛を唱へる。

お千代は懷から硯を取出し、夫に向つて「辭世の詞を残されよ」と勧めた。半兵衛乃ち筆をとつて、「はる／＼と濱松風に探まれ来て、涙に沈むざざんざの聲」と記した。お千代も「古へを捨てばや義理も思ふまじ、朽ちても消えぬ名こそ惜しけれ」と書いて、一處に卷納める。

半兵衛は懷から狀箱を取出し、辭世の巻物を其の上に置いて、胸を押開き、脇差を抜いて臍腹に突立てて前へ引廻し、悲歎にくれるお千代に、白縮緬の扱帯を裂かせて疵口を包ませ、「腹を切つたのは、實父に誓つた起請文に背かぬ爲に、亡君への迫腹である。これからがお前と共に死ぬる八百屋半兵衛ぞ」と語り、お千代にも引裂いた扱帯を岩田帯と祝うて締めさせ、相共に懷胎四ヶ月の兒に名残を惜んだ。

折から明け六つ（午前六時）に撞く寺の鐘、生滅々巳の聲に響き渡る。お千代は端坐して合掌する。其の傷々しい姿は、海棠の雨に惱めるが如くである。半兵衛は念佛を唱へてお千代を刺せば、お千代は夫の顔を見守りながら、次第に息絶えた。時に年二十四。半兵衛は妻に遅れじと、刀を取直して咽を突刺し、三十八歳を一期として、潔い最期を遂げた。

評

家政に苦しみ抜いた姑は、睦じい若夫婦に對して妬みを感じ、邪魔者視した。これを知る總ての者は、邪険な姑を憎んで若夫婦に同情した。姑は嫁の派手好きに難癖を附けて去らうとする。嫁には實母が在るが貧乏で、實家に歸れぬ弱味がある。親孝行な半兵衛は妻の苦悶に同情して、共に死なうと決心するに至る。あはれ何としても悲運に咀はれた弱い人たちである。

道行の文は、興味乏しくて難澁である。さばれ、大佛殿勸進所の門前で、若夫婦が情死する悲惨な心胸と状態とを描寫した所は、哀れ深い文である。

第三

- 新鞞 大阪新鞞御所をいひ、八百屋半兵衛の住居せる町。「辛氣辛氣の新鞞」は同じ頭音を重ねた所謂韻法。
- 地水火風 これを四大といひ、佛法では、世界の萬象皆この四大の和合によつてなるといふ。「國覺經」に「我今此身四大和合」。近松作「心中天の綱唄」に「このからたは地水火風、死ぬれば空に歸る」。以て人の身軀の意にいう。後出の「四つ」をも見よ。
- 光陰早き八百屋 光陰早きこゝ矢の如しを八百屋にいひかく。
- 吉野葛 大和國吉野の名産。こゝは内證共に好しいひかく。以下の文も八百屋店の品物にいひかけたのである。
- 結帯者 お人よし。
- 蔭の姑 蔭の裏「たう」をいふ。「増補俚言葉」に「ふきのしろとめ」大和の方言にてふきのたうを云。蔭の姑の苦いを、姑の苦にいひかけた。
- ひたしもの 蔬菜などをゆめてで醬油にひたし

世の中は辛氣辛氣の新鞞、地水火風を借住居、光陰早き八百屋見世内證ともに吉野葛、練れた親父は結構者蔭の姑苦口に、嫁菜の袖をひたし物千代とはあだの女松茸、二世の縁さへ瀬に變る、淺草海苔と身は焦れ、何としようがもししよう

たものを浸物といふ。以て姑が嫁お千代をいぢめて、お千代の袖を涙にひたすをいひかく。

○あだの女松茸 名こそ千代なれど、はかなき命の女である。そして松茸にいひかく。松茸は男のものを意味する。よつて二世の縁につづけた。

○二世の縁 夫婦の縁。蔭に、親子は二世、夫婦は二世、主従は三世の縁といふ。

○瀬に變る 夫婦の深き契りも、惡姑の爲にあつた涙を立て家内不和となつてこの世に淺い縁となるを淺草海苔にいひかく。

○淺草海苔 東京の名物。もともと武藏國淺草川邊から出たのでこの名がある。淺草海苔は燒き干すによつて「身は焦れ」というた。

○しよろろ 松露。麥並しよろろ科の菌で食用となる。そして「爲よろろ」にいひかく。

○宵庚申 庚申の宵。庚申の日は年に六回あつて、青面金剛の縁日である。こゝは、享保六年四月五日の宵庚申をいうた。

○精進 佛道を勤修して懈怠せぬこと。以て庚申様を信仰する心あつきことをいふ。そして精進料理をいひかく。

○出しに使ふ 手段に利用する。

○譯知り 色道をよく辨へたるをいふ。粹。

○黒める 隠蔽する。くまます。ごまかす。

○氣のとくく 氣の毒に疾くくをいひかく。氣の毒とは我が心苦しいこと、自ら安んぜぬこと。疾くくとは算盤珠をはじく事の疾きさま。

○談義 對談法義の意。佛教の法話。説教。

○同行結 同行者が友を相結ぶこと。

○無い袖振る 隣に無い袖は振られぬ。この文は、出さうにも金が無ければ交際されぬこの意。

○今宵の當屋 夜食が出る。庚申祭の日は夜更かしをして、飲食をする俗習がある。八百屋仁右衛門方では夜食せぬ筈であるが、庚申祭の夜はいつでも、控を守らないで夜食させるこの意。黒川道新編「日次紀事」正月の條に「六庚申夜亦被供酒業於青面金剛、人復賜飲食於殿中男女、則被供御遊、證承亦多有斯儀、俗間亦獻七種茶、供雙瓶酒而祭之、朋友相來、多喫赤小豆粥、宴遊到雞鳴而止、是謂庚申待」。

○しゆむ しむ(送)の訛。酒が全身に浸潤するをいひ、酒宴の酣なるをいふ。

○あどもひの路か。あどもひは「あど

にも、心ばかりをつくくし、筆には盡きぬ憂き節や、宵庚申を精進のたしに（船をこし上陸）使うて半兵衛は、晝より出でし留守まもり仁右衛門甥に嘉兵衛とて、戀の物馴れ（おひ）譯知りが首尾をくろめる墨硯、手代利介が算盤も、氣のとくくと弾くなり、後世の元手の念佛講閣路を照す小提灯、仁右衛門夫婦奥より出、ホ、ウ嘉兵衛、奇（い）特に精が出る、若い間は銀好き、年寄つての談義好き、是人間の一大事同行結（おひ）の掛錢も、無い袖振つては附合はれぬ今宵の當屋は何時とても、法度を背いて夜食が出る、酒もしゆんだら夜が更けふ、半兵衛が追附け戻る迄見世をば明けな寝（おひ）まいぞ」と、老の繰言こまやかに、詞のあども針を持つ（おひ）姑はつこと聲、半兵衛は今夜戻りやせぬ、表も裏も締めて寝や、夫婦が聲で叩かずは必ず戸をば明けまいぞ、合點がいたか」といひければ、コレ嗅、さがなふ物をお言やるな、養子に（おひ）來てから今日迄、夜泊りをせぬ半兵衛が、庚申参りすればとて戻るまいとはなせおしやる、「サア半兵衛の参りやつた庚申様は石町、伯母の所へ先度から嫁の干代めが來てゐるげな、顔突合せ夜もすがら庚申待をしをらふ」と、女の性は嫁や（おひ）子の中も境界悋氣口、内外の者の聞く前も迷惑そふに仁右衛門は、はて扱それも

ともなし(後件)の義。人の話に合はせて語ること。迎合。應答。

○針を持つ 内心陰險なるをいふ。

○つこと聲 「つきらららら」(夜半鐘聲)の約説であらう。「こら」は「こら」もいふ。さかりなふ。腹立ちけな無愛想聲。

○夫婦云々 仁右衛門夫婦は寺詣でに外出するのであるから、自分等が戻つて戸を叩くにあらずは、明けてはならぬといふのである。

○さがなら しゃうわる(性悪)う。(既出)

○庚申参り 四天王寺南大門の南にある庚申堂(本尊は青面金剛)に参る(一)。

○石町 (既出)

○庚申待 庚申の夜は朋友相聚り、多く赤小豆粥を喫して宴遊し、雞鳴に到つて止む。これを庚申待といふ。待は「まつり」(卷)のつまつた語。

○法界情氣 彼此の差別なく起す情氣の意。己れに何の關係もなきに起す嫉妬心。

○見ざる聞かざる言はざる 庚申の夜には、三猿が夫れく目耳口を掩うて、謹慎の調子を寓する像を掲げるによつてかくいふ。この繪像の起りは、智證大師が唐から之を傳へて、天慶二年に初めて内裏で行はれたに始まるといふ。

○知らぬが佛 誰に知らぬが佛、見ぬが花。

○接木 養子に喰へた。そして半兵衛を模、千代を標と見立てにいふ。

○雨露の恵みも薄き 繼母にまいなまれて、恵みも薄き半兵衛夫婦に喰へていうた。藤曲「熊野」

儘にしや、見ざる聞かざる言わざるが、庚申様の御誓願、知らぬが佛南無阿彌陀、

南無阿彌陀佛」と繰る數珠の、眩きながら打連れて表へこそは出でにけれ、接木

の枝は、雨露の、恵みも薄き桃櫻、半兵衛夫婦が身の上に今こそ、思ひ知られた

れ、五日と限る約束の今日さへ暮れて初夜の鐘、覺悟は胸に極まれど同行中の扱

いを、若しやとばかり頼みにて、知死期待つ間の二人連親の目盗む夜歩きは、我

宿ながら忍ばしくそつと潜戸に耳寄せて、内の様子を窺へば、嘉兵衛は筆を持ち

ながらつくつく物を思ひ顔、「ナント利介、お婆が先の氣相でも、寺同行の御意見

で、邪険の角が折れうかい」、「イエー、存じも寄らぬこと、生れ附いたる熊手性、

今度の起りも根が悠から、按摩取の印可めが、跡先なしの饒舌口、「さる浪人の娘

とやら、年は十八敷銀は大金で七十兩氏系圖より確なる商人へ遣りたいと、頼ま

に「草木は雨露の恵み、養ひえては花の父母たり」。

○五日と限る約束 本曲第一、半兵衛の詞に「今より日を切つて五日が内にさつぱりと、お千代を内へ呼入れん」とある。

○初夜の鐘 午後八時頃に撞く寺の鐘の聲。

○扱ひ 仲致。

○知死期 俗説に人の死ぬ時刻は自ら定まつてゐるもので、概して潮汐の退く時刻に於て死ぬといふ。

○氣相 顔の氣色(げはひ)。

○邪険の角 邪険で角立つを角に喰へていふ。

○熊手性 貪慾な性態。熊の手の形に作つて物を掻き寄せる具に熊手といふものがある。それに喰へて物を掻き寄せて我が物にせうとする慾深い者をいふ。近松作「淀鏡出世徳娘」に「熊手上慾よこ言はるゝも口惜し」。

○敷銀 縁づく時の持参金。

○わわしい 心くねくしい、又は口やかましい意にいら。詳しくは「近松語彙」を見よ。「わ、しいわろ」とは、心のねがけたお喋りな奴の意であつて、老婆をさす。

○お主 お前。印可をさす。

○御料 こは、年若い人の妻にいふ敬稱。嫁御料とはお千代を敬つたやうで、其の質卑しめた語。(見索引)

○一杯 一杯差上げた。

○天目酒 茶碗酒。「天目」は、我が國の僧侶が支那天目山の寺院に留學して、其の處の寺院で使用する茶碗を携へ歸つて天目といふのが傳じて、汎く茶碗の稱となつた。詳しくは「近松語彙」を見よ。

○ひいやり 冷氣を感じること。「胸もひいやり」とは、肝をひやすこと。ぞつぞつすること。

○まい ころつくさま。うろく。

○扱衆 半兵衛夫婦と姑との不和を仲裁する人たち。太郎兵衛、五右衛門、七兵衛をさす。

○守 守袋。守札を入置く袋。

○小宿 男女の密會、又は何かの用を達しようとする人の爲に、一時まがし間貸する宿。

○中戸口 店庭から中庭に入る戸口。

○青面金剛童子 庚申はもと支那から起り、道教で星を祭つたものである。後に佛教に應用されて、帝釋天王の使者青面金剛の化身を稱することになつた。

○あらたに 顯著に。靈驗いちじるく。

れます」と聞くと早わ、しいわろが小聲になり、らどふやらそれは耳よりな、かねがねお主も知る通り役に立たずの嫁御料、さらりと去つて其跡へどうぞ世話して貰ふてたも、畑をして來ひ一杯」と天目酒に呑込んで、先へ言込むこちらゑも、返事聞かせてひつそく、領き合ひの最中」と、聞かさへ胸もひいやりとお千代は其處を立退けど、半兵衛はまだまいくと、這入りたそふに覗きみる、袖口取つて引戻し「扱衆の返事迄、待つ事もない我々が、最期の衣裳も守まで、小宿へ出してある上にうろく其處に居給ふは、今の咄にお心が残りや、する」と恨むれば、「ア、由ない事をいふ人かな、おれは心が残らねど、去られたそちを此内ゑ、呼戻したる心にて中戸口から手を引かば、それぞ誠の夫婦づれ恨み悔みも晴れぬべし、思案こそあれ暫らく」と立忍ばせて半兵衛は、潜戸押明けずつと入、兩人共に待つたであろ、日暮れぬ先に戻らうと思ひの外に當月は、いつに變つて大參り仔細を聞けば去ぬる夜、音楽響き花降りて雲中に御聲を上げ、庚申の御神體青面金剛童子とは、文字も青き面と書き青きを好み給ふ故、青物賣りを守らんとあらたに御告ありし由、言ひ傳へ聞き傳へ市の側から打ち明けて、參る程

○市の側 大阪天満市、即ち天神橋北詰上手から龍田町までの濱側をいふ。青物などの市場があつた。

○打明ける 皆家を留守にして外出するをいふ。近松作卯月の潤色「中之巻」に「石山の繁昌、京大坂が打明ける。」

○ける程に 念をおすとき重ねていふ詞を略して、「ける程に」といふ。近松作「松風村雨束帯」に、「互に深うなつて来て、上る程にける程にまんま京まで上りつめて。」

○鰐口 神社や佛堂の前簷に懸け、銅製で扇風中空で下方に横に長き口あるものをいふ。鰐口の前に接して布を斜へる繩を吊下ぐ。衆語人はその繩をこつて打鳴す。鰐口の名は其の形状が鰐の口に似たるよりの俗稱で、其の製は伏鉦鼓を二つ合はせたものから起つたもので、鎌倉時代の中頃から出来たものであらう。

○三時半 七時間。

○そやす そのおかし、はやす。おたてる。

○飛介 輕卒で直に飛出す者の擬人名。

○相場が悪い 形勢が不利なるにいふ商人などの詞。面白くなくて氣が逆まね。近松作「曾根崎心中」に、「九平次も氣味悪く、相場が悪いおぢやい、こゝなよな衆は異な事で、おれらがやうに銀遣ふ大差は嫌ひさうな。」

○竝大抵ぢやあるまい 普通では濟さず、怒つて甚だしくいぢめるであらう。

○嗜み 心懸け。

心中二つ腹帯

にける程に御門前から押合ふて、鰐口の緒急取附く迄ゆつくりと三時半、かゝる尊き物語聞いて内には居られまい、嘉兵衛も利介も參つて來い、參れ〜とそ

やされて、常も利介は飛介で、帶もそこ〜駈出れど、嘉兵衛はじろりくわんと

した、顔附さへも氣味悪く、や、暫しためろふて、親父や母は同行衆免や角とあ

る挨拶に、夜明けでなくば歸られまい、隠れて嘉兵衛も參つておぢや、「否まあ

止に致しましよ、相場が悪い折節ひよつと知れたらあの婆が、竝大抵ぢやあるま

い」と、取てもつかぬ挨拶に重ねて返す詞なく、「成程それはよい、嗜み其心から此

頃は、商賣に精が入る檀那衆から青物の、御用は言ふて來なんだか、一誠に忘れ

て居りまする、平野屋殿から明日は振舞をする半兵衛に、ちよつと參れとお使が

二三度も立ちました、ム、そうである〜、行かすばなるまいさりながら、殊

の外なる草臥やう名代に往て聞ておぢや、「イエ〜先より念入て、獻立も相談

する、直にとあるの御使、御大儀ながら」と動かねば、半兵衛はわざと腹立て聲、

「仔細をこねる男がある、獻立一つ書く程の器量を持たぬ其方なら、明日が日に

○振舞 慶慶。

○男 時に嘉兵衛をさす。

○冥途の旅宿り 冥途に旅立つ宿り。この宿より死に出ねばならぬをいふ。

○數ならず 取るに足らず。取立てて言ふ程のものでない。
 ○介抱 たすけ抱く義。兼背の意にいふ。
 ○嘸な袖の雨 さぞや涙に袖を濡すこゝであらうとの意。
 ○すたく 息せはしく急ぎ歩むさま。

ても半兵衛が死んだら八百屋仕舞ふか」と、きめ附られて是非もなく不審顔して出て行く、影見送りて表へ出千代が手取て引入る、跡は鎖しに詮方も涙先立つばかりなり、千代は覺えず聲を上げ「移れば變る世の中や、二人添寝の諸白髪千」と頼む我家を、今日は冥途の旅宿り」手馴れし襖押入も、名残惜しげにあそこ爰、見世の先なる小板敷撫でつ擦つ、戴ひて、「仁右衛門様の折節に爰に坐つておわせしと、思ひ出すも懐かしや、不調法なる自らが悪い所を陰になり、日向になつて明暮に、姑御へのお執成し、數限りなき御恩をば死しても如何で忘るべき、去らる、朝も膾して手づから御膳据へたれば、物をも言わずほろりつと、泣いてお箸を取られたる、其面ざしが見納めとなり行く身こそ悲しや」と噎せかへ、るこそ、道理なれ、ともに泣く音の半兵衛「尤なり、さりながら、そなたの事は數ならず國を離れて十五年、誠の親より大切に介抱ありし甲斐もなく、先立つ我は不孝とも物知らずとも思されん御心底こそ恥かし」としやくり、上げてぞ居たりける、餘所にも嘸な、袖の雨、風呂敷包手に提げて、嘉兵衛すたく立歸り、しやくれど明かぬ表口割る、ばかりに打叩く、二人ははつと立上りよろつく内に

○押込 おしけれ押入。これに押込むをいひか

○慮外 たしぬけ、又は無慮の意。

○とろく とほおく(遠東)の約訛か。奥まり遠い所の義。以て奥底の意にいうたのであらう。「檢訓集」に「とろく」俗に山のしろくなどいへり、遠奥のつしまりたる辭なるべし、とほろくともいへり。

○下に居よ 坐つてゐよ。「ひらかな盛衰記」第三に「氣が後れて物が申されぬ、まあ下に居て下さんせ」。

○本汁 本膳の汁で味噌汁である。

○大寺やほとりに遊ぶ童 汁椀の時糍に、四天王寺に兒童の遊べるを描いたのをいうたのであらう。

○ちしや白魚 「ちしや」は高直で、菊科實瓜菜(にかな)屬の草本、葉を食用とする。本汁に高直・白魚を入れる事をいうた。そして高直に血、白魚に死をきかした。

○有情非情 有情は生物類をいひ、非情は草木等をいふ。以て白魚・高直に應じる。白魚・高直が椀の中にあるを「乗合」というた。

○貝焼 貝を其の附いてゐる殻のままに焼くこと。貝殻を其形によつて棹なき舟に見立て、以て千代が塗方にくれる意を諷した。

外よりは、「明けよ〜」と喚く聲、「お、〜〜」とばかりにて、彼方此方と這い廻り、やう〜と身を押込に、千代を忍ばせ半兵衛は、戸を明くれども打明けぬ、胸塞がりてきよろ〜と、物をも言わず立まへば、嘉兵衛も共に隅々を覗き廻りて押込を、明けんとするを立隔たり、嘉兵衛慮外な何故明くる、「ハテ珍らしい御咎め、此押込は道具入れ、用があつて明けまする」「イヤ〜用があるにせよ、宿へ戻つて直様に、其上包んで手に提げしは、何方で取て來た」「ム、風呂敷包の疑ひなら、是御覽あれ赤毛氈」、「ハテ似合はぬ物を持つてゐる」、「イヤ様子は追つて申すべし、夫婦の衆の留守の内、櫃のとろくへ納めん」と、明けにか、れば手を取て、「近頃小氣な男かな、見附けられたら半兵衛が遠州土産と云うておけ、まづ下に居よ商賣の返事が聞きたい獻立は、どふじや〜」と紛らかす、詞のはづれ顔の色心は附けど附かぬ振、押鑓まりて畏り、「明日のお振舞お客の方から獻立が、謎に致して参りしをあらましばかり覺書、聞し召せ」とぞ讀上げける、「まづ本汁に大寺やほとりに遊ぶ童は、ちしや白魚と知られたり、有情非情の乗合に棹なき舟の行方とは貝焼などの事ならん、木の葉折り敷く其上

○**韓紅** 韓國から傳はつた紅の襪で、紅色の美しいものゝ美稱。以て鮮血の意にいうた。

○**子持鮎** 千代は懐胎してゐるので、それをまきかしてかくいうた。

○**冷し物** 肝を冷すに獻立上の語をいひかく。

○**獻立** 膳部にはほすべき料理の種類次第。これに次第成行きの意をかけた。

○**恨み葛餅** 葛の葉は葛はひらり／＼と裏返つて見えるから、裏見葛を恨みにいひかけ、葛を葛餅にかけていひつづけた。「葛餅」は葛粉を水に溶き、砂糖を加へて煮固めた餅である。

○**後段** 「貞丈雜記」卷六に「客のもてなしに、飯の後に粥類にても何にても出すを、今の世には後段といふ、古はなき詞なり。」(こゝに)は、飯の後に葛餅を出すといふのである。そして何も恨みず生きたがらへるやうに後の事を考へよこの意を諷した。

○**さあらぬ顔** 半兵衛は喜兵衛の意見を見をそれと悟つても、懇と何氣なき顔附。

○**手だれ** 巧者。「倭訓栞」に「手足たり」の義成べし、手にたらぬと反對也。

○**くさり合ふ** 男女深く契り合つて離れぬをいふ。「くさり」は着し縫で、つながる義である。但馬の氣味がある。腐縁などの「くさり」もこの義である。

○**ちえ／＼くり事** ちちくり事。男女の私通すること。蓋し／＼くり事。ちちくり事。男女の私通すること。

○**腹に帯** 懐胎五つ月になれぬ腹帯をする。近松作、せみ丸、懐胎十月の由來の條に、「扱五月に及んで、廻る腹帯や地蔵蓋麻の受取なり。」

に、**韓紅**の心中とは、哀れとぞ見る**子持鮎**、添ふに添はれぬ中々にいつそ刃に刺身とは、包めど我が吸物に幾度肝を冷し物、思ひ直してたび給へ、折が變れば氣も變り、又面白**獻立**の出来まいものにも候はず、定めなき世は人の常何をか恨み葛餅が、後段の筈に候」と、心に餘る意見狀押當て、てこそ讀みにける、半兵衛は**さあらぬ顔**、**扱面白**き**獻立**や、併し魚類の振舞をなせ肴屋は請取らぬ、「さればそれにも咄あり、お出入致す魚賣に、堀江彌兵衛と申せしは、器量はさのみ好からねど戀路の手だれ上手者、惚れたお山が三百人、忍んで逢ふが四五十人中に取つても若松屋直と互に腐り合ひ、女房に持つぞ持たれんと、契りを交はす間々に市とやらいふ生娘と、ちえ／＼くり事が高じて来て、はや五月の腹に帯、隠されもせず親も知り、つい呼入れて嫁びろめ祝儀の樽を贈るやら、三國一を謠ふやら其處らあたりがざざめけば直が燃え立つ胸の火に妓女傍輩が焚付けて、彌兵衛が往て居る先々急附いて廻つて恨み泣き、食附き囁附きしがみ附き、去るか死ぬるか死ぬるか去るか、二つ一つとせたとげられ孕んだ女房は去なされず、直はいよ／＼堪忍せず、是非に及ばず心中し難波の野邊の草の露、名は繪草紙に留ま

○三國一 日本支那天空にも比すべきものなきをいふ。當時は「三國一の何になりすまい、しやん／＼」といふやうな唄を祝宴の席で多く詠つたものである。西鶴撰「萬の文反古」卷四、「祝言させて、三國一を歌うて仕舞ひ申候」。

○よね 色茶屋の勤め女をいふ。妓女。羞し遊女の顔容が若藤の如く美しいといふ意よりして、遊女を若藤と異稱し、また米よねを若藤と異稱するより、遊女をよねともいうたのである。

○杖附ける おたてる。人を煽動していらたしめる。

○せたげられ しへたけ(塵)られ。手厳しくせまられ。

○繪草紙 觸寶とも讀寶とも稱した。天災地變や敵討高藤の類や、役者評判・情死・罪人仕置など、總て其の當時起つた世上の珍聞異事を拙劣な繪畫に描き、小割書をした印刷物で、僅か一二枚の粗悪な小冊子である。繪草紙の賣價は一枚物で三文、上下二枚物で六文程であつた。詳しくは「近松語彙」を見よ。

○膝とも談合 他に相談するの利あるをいふ語。

○こちと 此方人。われら。

○絶りかける 何か言はせて端緒を得ようとしかける。話しかけて先方の心の端を言はせようとするを、「口をむしる」といふ。

○口占 言葉の様子を聞いて、さうしたらよいかと判ずること。

○わくせき あくさく(齟齬)の轉訛。せせかし

りぬ色と義理とに迫つては、日頃の智慧も出でぬもの、そこが膝とも談合でこちとが様な者にしても、明かして言わばどふぞ又死なきぬ首尾もあるべきに、聞へぬ堀江の彌兵衛や」と、むしりかけたる口占に、半兵衛ぎよつと行詰り物をも言はず押込の、内にお千代はわくせきと身を悶へたる胸震い、襖に響き敷居までびりり／＼と鳴り渡れば、女は内らで鼠鳴き、男は外から猫の眞似、憂きが中にも可笑しけれ、嘉兵衛をろりと立上がり、美濃吊など引かれては元が息になる穿鑿」とつか／＼と立寄るを、半兵衛周章て突倒し、嘉兵衛お主も相應の惡所遊びもする男、ひよつと出合ひの初戀を見現はしては興がない、そこらは粹め氣を通せ通せ／＼と詫びにける、嘉兵衛疊打叩き、あんまりそれは曲がない、なせ有様におつしやれぬ、私ことは二三度も追出されたる身なれども、伯父仁右衛門に色々と詫言立て給はりし、お前の情で立つてゐる、嘉兵衛に何の遠慮がある如何程隠う風よこそ。

○内ら 内うら(裏)の略。内。

○鼠鳴き 口をすほめ、鼠の鳴く如き聲をなすこと。

○美濃吊 美濃は美濃袖をいひ、吊は吊袖である。美濃袖は美濃岡峰屋村の名産である。よつて峰屋袖ともいふ。これを吊袖にすれば甘味が豊富で非常に甘い。

○元が息になる 利子を得て元金を踏倒されるをいふ。以上大損となるをいふ。

○穿鑿 さがし求める義より轉じて、なり行きの意にいたる。仕儀。

○惡所 色茶屋。遊里。遊廓。

○曲がない 面白くない。愛想が無い。情がない。

○重疊 至極好都合。大満足。

○切羽 切羽つまる。ぬきさしならぬ。

○時にこそ 時にこそ情死もすれ。

○上町 「難波丸瀬目」に「上町」は、京橋より大坂の人口、御城東のうしろより、西は東横堀まで高麗橋農人橋等の掘筋を限ミテ、云々。

○五貫目 これを享保銀ミすれば餘り多額になる。よつて四貫銀ミ見る。四貫銀は享保銀の四分の一しか價値がない。享保小判金一兩に享保銀五十友七分特ミし、享保小判金一兩を二千圓ミ見る時は、四貫銀五貫目は四百九十三圓餘に當る。

○わりなけれ 理無しの義。親しうて隔のない意。

○慈悲なる親の血筋 嘉兵衛は仁右衛門の甥であるからかくいふ。

○見交はすばかり打守り お千代ミ嘉兵衛ミが、互に顔を見合つて打見守る意。

○ナウおいとしや 嘉兵衛がお千代にいうた詞。

○此者 嘉兵衛をミす。

○よに いかにも。

○負うた子に教へられ淺瀬を渡る 賢い者も時ミしては智慧の乏しい者の言によつて、發明する所あるをいふ意の談。

○其方が意見にて この句は「打晴れた」にかか。

し給ふても、聞かねど知れた御心底同行衆の扱いが、叶ふば重疊さもなくば刺違
ゑんとの言合はせ、見附けた所は違ふまひ切なふも悲しうも、思し召さるゝ筈な
れども死なんと迄は短慮の沙汰、世に心中も多けれど銀に詰るか逢ふ事の、なら
ぬ切羽の時にこそ、八百屋といへば輕けれど勝手乏しい事はなし、上町邊に借屋
を借り行通ふても逢い給へ、假令五貫目三貫目帳面合はぬ事あらば、嘉兵衛一人
が引負ふてお二人の名は出すまい、命の代りに立たいと、思ひ込んだる私が詰ら
ぬ意見は仕らぬ、思案を變へて下さりませ、縫り附いても取附いても、中々死な
せはしませぬ」と、誠を立つる男泣き優しく、も亦わりなけれ、半兵衛も稍涙ぐ
み、「慈悲なる親の血筋とて、頼もしい氣を持つものかな、其心とも汲み知らで隠
せし所が面目ない、お千代お千代」と呼びかくれば、面はゆげにも立出づる目は
泣腫れて顔瘦せて、見交はすばかり打守り、「ナウおいとしや」と言ふより外は、
なかりけり、半兵衛心に思ふやう死ぬると言わば此者が、附纏ふて離れまじ、賺
して此場を遁れんとよに嬉しげに打笑みて、「げに負ふた子に教へられ、淺瀬を渡
るといふ如く其方が意見にて、免や角思ひくづ折れしも洗ふた様に打晴れた、借

○偽り「當分は先づ親里へ戻して置くというて、共に家を出て死なうと思つてゐるのであるから、かくいうた。

○誠と嘘 半兵衛夫婦の言を嘉兵衛は誠と思つたのであるが、其の實半兵衛夫婦は嘘を言つて嘉兵衛をたましたのであるから、斯くいうた。

○夢に夢見る 夢の中に夢を見る。極めてはかなき意にいふ。

○どぎく 時々か。

○叶はずし「叶はずして」の誤であらう。

○夜の花見 蓮花咲ける冥途に行くこゝを諷した。

○若氣の不覺 嘉兵衛は年若くして、お千代が死を諷する意をささらぬが失策だといふのである。

家の事も内證も萬端お主を頼み入る、當分は先づ親里へ戻して置くがよい道理、

女房嘉兵衛に禮言や」と偽り知らす目くばせに、お千代もやがて合點して「お志の數々は、どふも詞に盡されず、夫婦が命の親様」と手を合はすれば此方らにも、

「若輩者の言ふ事を得心あつて嬉しや」と誠と嘘の笑ひ聲夢に夢見る如くなり、仕濟ましたりと半兵衛はお千代と共に立上り、伯母の方まで宵の内送り届けて明

朝は、駕籠で故郷へ送るべし、親父や母の歸られたらまた庚申から戻らぬと、どぎく首尾を合はせて」と言捨て行くを引留め、件の毛氈差出し、「お駕籠の内の敷物に進上致すと申す儀は、慮外がましく候へども嘉兵衛が爲の寶物、追出され

たる其砌友達もが指差して、疊の上では死ぬまいと陰言いふが無念さに、心直して去んで見しよ、それとも願ひ叶わずし辻垣下で死ぬるとも、毛氈敷いてゐる

ならば疊の上も同然と、意地を立てたが身の幸、再び此家ゑ立戻る嘉兵衛にあやかり給へとの、御祝儀なり」と言ひければ、お千代はちつと笑顔して「何より嬉

しいお心づけ、此毛氈で夫婦づれ夜の花見に參らん」と、詞の外れ氣も附かぬさすが若氣の不覺なり、然る折節仁右衛門夫婦同行衆と高咄はや門近く立歸れば嘉

○椎茸の苔 椎茸の蒸かきつゝまた開かぬもの。
 ○膝を抱く 膝も談合といふ語を利用して、
 相談方になる意。

○ひつかける 酒もひつかけるで、酒も飲んで
 るといふのである。

○氣披ひ 心遣ひ。近松作「心中天の細柳」上之
 巻に「叔母二人の氣披ひ、敵になり味方になり、病
 になるはざ心を苦しめ。

○取附け引附け 言葉に取附け話に引附け。

○かいだるい かきだるい(掻意)の音便。「か
 い」は接頭語。「頤のかいだるい」は、餘りしやべ
 つた爲に頤がたるくなる意。

○あへんど 「あ」は接頭語。「へんど」は「へん
 たみ(返答)のつまつた語であらう。

○大切な事：仕方ぢやと お千代を難雜す
 るといふ大切な事件を、我々が除所ほかで傳言を聞
 いて、唯それだけで、お千代を庇護する仕方だとの意。

○服ればし 「服れば」は服れ面などの服れで、立
 腹する意。「はし」は其の事の限りを表はす接尾語。

○鬚籠 竹などを編み残した端の、鬚のやうにな
 っている籠。ここは八百屋であるから、鬚籠の中に
 果物の類が入つてゐるのである。

○夫婦合ひには別儀なし 半兵衛夫婦は睦
 じくあつて、互に離別の心なし。

○不義 密通。姦通。
 ○ちん／＼ 男女の交りの極めて親密なこと。
 『浮世風呂』三上に「正はとしいへは邪魔になるのさ、

兵衛騒がすお千代をば、小櫃の先に屈ませて半兵衛共に椎茸の、苔を選つて居た
 りけり、仁右衛門戸口に立休らひ、「太郎兵衛殿・五右衛門殿・七兵衛殿には取分け
 て、遠方といひ夜も更ける、平にお歸り遊ばされい」、「ハレヤレいわれぬ御遠慮、
 お膝を抱きに三人が申し合はせて參るから、七兵衛一人は歸られぬ、夜食は食べ
 る引つかける煙草一服御亭主の、お氣披ひにはなるまい」と、明るる潜戸我一と
 せり合ひ内に入りけり、五右衛門先へ進み出、早速ながら申しましたよ、御夫婦
 共に能う聞かしやれ、是の嫁御が去られても手前に損も仕らず、呼戻されても此
 方に別に利得も無けれども、よく／＼懇意に思ふ故宵から今まで三人が、取附け
 引附け 頤の、かいだるい程詫びれども、あへんども打たれぬは侮つての儀か但
 又、大切な事餘所外で言傳わざな仕方ぢやと、服ればしあつてかと是まで附いて
 は來れども、言ふべき程は最前に底を叩いて仕舞ふた故、急に才覺なりませぬ兩
 人出やれ」と押退さる、太郎兵衛鬚籠に腰を掛け、「夫婦合ひには別儀なし不義放
 埒だにあらざれば、何を仕落何を非難に去なすべき、始去りに極まつたり假令五
 日が十日でも、お千代の顔を見ぬ内は、太郎兵衛が朝夕を、此内で養はれん方々、

さうたらうのう、おちんちんで、「何處露に、
「ちん／＼」(榛訓栞)俗に交りよきをチン／＼といふは知言の約りたるなるべし、愚案、此説いたりす
ぎてうけがたし。

○小袖 絹布の綿入。

○延 延紙の略。和州吉野から産出し、大きき繰
七寸横九寸ばかりの小形紙である。伊達等は此の
紙を懐中し、鼻環を拭去るなごに用ひるによつて鼻
紙ともいふ。

○奉加 神佛に寄進する財物に我が財物を加へる
こと。寄進。

○鳥兜 毛質料の宿根草。夏日桶上に根状花序を
なし、花舞が後方にふくらみ伸びて、帽状をなせる紫
碧色の花を開く。又この花の形に作つて舞樂に冠
兜にこの名の物がある。紋所にもこの名の物がある。

○太夫 最高位の遊女。

○八文字 女のしみやかに品を作つて歩く足つ
き、即ち内八文字のこと。「幽遠隨筆」巻上に「今遊
女の歩むを八文字を踏みてなごいふ」。

○手はあがる 手を引く。關係を絶つ。

○一文字を得引かいで 文盲なるをいふ。

○氣の毒 心を苦しめること。こまつたもの。

○結構とは若荷の事 結構者とは鈍物の事であ
るの悉を寓した。諺に若荷は鈍根草といふ。近松
作「げいせい戀物篇」に、「壽は利根草、若荷は鈍根
草」。狂言「鈍根草」に、「いごご鈍な奴めが若荷を食
ひ、いよいよ鈍になつて」とある。

○とうなんとは野老なり…つれをのこ
るをりの判官第四、しみづの段に、「いかに長殿こ

いかに」と詫びにける、姑はつゝと出ア、太郎兵衛様よい推量、仁右衛門殿
は佛様、女夫の仲はちん／＼、去なしたは此母、お前の様なよい衆の嫁御にして
は似合ふが、此方づれの内にて飯をも炊かにならぬ身で、肌には小袖鼻紙は、
延でなければ手に觸れず、私らはお寺の奉加さへ百目の銀は大儀なに、五兩とや
らの櫛を挿し鳥兜程懸出して、大夫の道中する様に狭い所を八文字、そこらあた
りの青物は、踏み潰されて芥になる、其費でも積つたら此身代は歪みましょ、是
が八百屋のお内儀に成り遂ぎやうか」とゑせ笑ふ、七兵衛にじり寄り、「こなたの
様に言ひ立つれば、詫言の手はあがれども、どこを聞いても其様によい事ばかり
は揃わぬもの、身どもが嫁は随分と、世帯はようする歩くにも、八文字は踏まね
ども一文字を得引かいで、是も又氣の毒、仁右衛門殿、そなたもちつと物言わし
やれ、嗅が怖さに黙つてか、結構者じやと囁かれて、あんまり自慢遊ばすな、結
構とは若荷の事、とうなんとは野老なり、せいなんとは芹の事、半兵衛連添ふお
れ御覽せよ、まづとうなんは春の初めのつく／＼し、せいなん
とは芹の事、うごもりとは山の芋、かごもりとは野老(こころ)じ
り、かはらうとは海老(えび)の事、一字二書いてひもじ(覆)
よ、現なみのをのつれをのこ(こころはら子殿原)にて御座なき
か」とあるに據つた。

○とうなんとは野老 同じ頭音によつた青物の名の謎。
東南は陽氣である、野老も男の一物なごに喰へて腸の物であるか
らくいふた。

○せいなんとは芹 同じ頭音によつた青物の名の謎。こ
れば、をりの判官に出てゐる。

○開の夜のつれをのこ 「なみのをのつれをのこ」のもぢりであらう。波の縋すけて風が覆れば琴の音がする。(波の音に琴の音がするののは、波の縋に風が覆手となるからであるといふ空想によつたものである。連れ男子「をのこ」は子殿原である。その子殿原に琴をいひかけた。この文は、開の夜にお千代が男子「をのこ」(半兵衛)を連れて出る意。

○腹に物言ひ 腹にかかりあひの意で、お千代の懐胎せるをいふ。

○うち問ふ 心の中を問ふ。「うらはは心底の義近松作」女殺油地獄「下之巻に」定めて懸も寄りましょよ、餘所の方からうら問ひける。

○水になる 無効になる。「甲陽軍鑑巻九下に」勝利の儀、皆水になる程に、一戦をきはめて。

○したが しかし。

○修羅を燃そ 修羅は梵語阿修羅 Asura の略、六道の一。修羅族は野心強く猜忌嫉妬妄執の念旺盛で、常に闘争するによつて、これを人が眼蓋の焰を燃すに喩へて、修羅を燃すといふ。「燃そ」は「燃さう」の訛。

○頭こそげて 頭蓋をけぶり割つて。

○身を持ちさうに 所持持がよさうに。

○明御 朝の敬稱にいひ、轉じて朝のこゝにいふ。

○家督 家督を相続さすこと。一家のあまめ。

千代なら、子殿原ではござらぬか、もし開の夜のつれ男子心中などを召されたら、取返しはならぬぞやちと相談もして見給へ、「如何にもおしやれば其通り、若い奴等の事なれば短氣を出すまいものでもなし、腹に物言ひありとも聞く、孫を愛して遊ぶなら嫁の憎さも忘れん、ナウ噂、何と思やる」と柔らを入れてうら問へば、「いか様こなたは如來様、二三十年身の油絞り溜めたる金銀が、忽ち水になる事を見ながら孫がかわゆくば、はてどふなりとなされませ、したが私には暇下され、短い浮世に氣に入らぬ顔見て修羅を燃そより、頭こそげて未來をば、助かる様に致そふ」と緩む氣色はなかりけり、仁右衛門今は詮方なく「半兵衛・嘉兵衛へ來い、様子は今聞く通りの事、いかにお千代に添ひ度ふても母を坊主にやしられまい、叶わぬ事と思ひ切れ、扱又嘉兵衛もよつく聞け、今では心持直し身を持ちそふに見ゆる故、幸甥御の事なれば家督にせんと思ひ付き、嫁を追出し半兵衛も出て行く様にしかけると、世間の人に謠はれては仁右衛門が名が汚れる、一夜も足は留めさ、れぬ今出て行け」と言ひ渡す、嘉兵衛驚く氣色もなく、「お前の詞を請けずとも此方から出て行こと、思案極めて居る故に恨に思はぬが、胴慾

○路頭に立つ 乞食になつて路頭に立つ。
○眉目 面目。

○イヤヤ暫し イヤちよつと、半兵衛が嘉兵衛の外出を制止したのである。

○早まり過ぎた御料簡 仁右衛門が嘉兵衛に出て行けと言つた事をさす。

○家出 嘉兵衛が家出。

○扱ひ 紛争(もつれ)の仲裁。

○こちと 此方人の義。自分。われく。

○結構者 前の「結構」は若荷の事」の條に述べた。

○ハテどうなりと御意次第 仁右衛門の詞。

○あんまり早うて本意ない 仲裁者三人の詞。

○酒は愁を掃ふ 酒を掃蕩(そうたう)せよといふ。「東坡集」洞庭春色詩に「應呼釣詩釣、亦號掃愁掃」。

なわ姑御、嫁一人が憎いとて大勢に憂目を見せ、嘉兵衛は爰を出て行くと明日か

ら路頭に立ちますぞや、お寺参りの行戻り菰を被つて附き廻らば、餘り眉目でも

あるまいが、それでも嫁が去りたいか堪忍がならぬか」と恨みても聊ちても、心

つれなく返事せず見向きもせねば詮方なく、すつと立つて行く所を半兵衛は引留

め、「ヤレ狼狽者どこへ行く」、「お暇が出たで去にまする」、「先づ待て、イヤ、

暫し」とて押合へし合ひ引据へて、「コレ親父様、早まり過ぎた御料簡、母の言分

一々に尤至極と思ふ故、千代めは身どもが去りました、誰に恨もないから家出

を致そふ様がない、それに此者追出せば結句にお名が出づる事、同行衆にも今迄

の千代が扱ひ拾置いて、親父様へ嘉兵衛をば、詫言頼み存する」と、聞くより三

人領き合ひ、「婆はこちとが手に合はぬ、仁右衛門殿は結構者、嘉兵衛事を詫びま

する」、「ハテどうなりと御意次第」、「あんまり早ふて本意ない」と笑ふてこそは

歸りけれ、母は兎角の詞なく奥へ這入れば仁右衛門も、入らんとせしが立戻り、

「半兵衛一つ飲んで寝や、酒は愁を掃ふとは、醫書にも書いてあるげな」と、し

ほくとして入にけり、「親の恵は深けれど、御縁は今が限りぞ」と、お千代もそ

○我が戀路：名取川 當時の流行小歌に筆を加へたもの。この歌に似たものは、近松作「心中宵庚申」道行の文中にも用ひてある。併せ見よ。

○雲の帯 玉雲が帯に似て山の腰をめぐること。以て思ひがまや／＼として、まつはり解けぬことにいふ。

○名取川 歌枕であつて、陸奥國名取郡を流れる川の名。以て名を取る、浮名を流すことにいふ。

○田簀の島 羅波にある歌枕。西鶴撰「一目玉鈴」四に「田簀島」今の北濱といふ所なり。大阪市北區堂島川に架せる橋に田簀島といふがある。

○葭葦 羅波の縁語。

○鞞 大阪新歌舞町をいひ、八百屋半兵衛の住所せる町。「うつつ鞞」は頭韻法。

○色の外なる色毛氈 情事を色といへど、その色の外なる色染の毛氈。

○非色物 染色へ一般の人は服を染めるに禁ぜられた色)の赤色物。赤毛氈なればかくいふ。

○濱松 遠江國濱松をいひ、半兵衛の故郷。これを濱松風にいひかく。

○玉鈴 玉鈴の身といふを道にかけていふ枕詞。

○知死期 俗説に人の死ぬる時刻は自ら定まつてゐるもので、概して潮汐の退く時刻に於て死ぬるいふ。

○煩惱菩提 一切の衆生を迷はすものと、正覺とは正反對の如けれど、本體からいへば迷も區別すべきものではなく、煩惱菩提一である。「願正止觀」に「煩惱即菩提」。

つと這出で、共に見送る後影、嘉兵衛は何の氣も附かず締め明けにする潜の戸、
 「早ふ／＼」と招けども猶も名残は鴛鴦の、泣かじとすれど塞きかねて、「わつ」と叫べば洩らさじと、打ちかふせたる、毛氈の闇より、闇に 出て行

道行星の數

我が戀路は糸なき三昧よ、何の音もせで泣き明かす、見れば思ひの雲の帯、扱も、短夜、心の急くにござんせ、否と、おしやると此方やもふ、そふさんせ、二人が仲に、名取川、おゝそれ、二人と二人と名取川、濡れて涙の血に染むる、田簀の島と、詠み置きし、難波の事も是ならん、葭葦のや變る世の、それも思へば夢うつ、鞞を出て二人連、色の外なる色毛氈非色物よと肩に掛け、つらき名残も、今宵ぎり生れかはりて、先の世は、とても殿御の古里の濱松風に誘われて、離れぬ仲の睦言を、徒になさじと思ひ詰め、夜の玉鈴道急ぐ、知死期くる、數珠のかす煩惱菩提と聞く時は彼の世ばかりの樂しみに、行かんとすれど卯月闇、涙にくれて道見へす思ひ、廻せ、ばはかなしや交せし、事の淺からぬ、

○彼の世 人の死して行くべき世界。他界。

○二世 親子は一世の縁、夫婦は二世の縁。主従は三世の縁といふ。

○水まさ 水増雲、即ち水高を増す雲の義。遊雲。

○津村 大阪市東區御堂津に北御堂との間で、淡路町五丁目、瓦町四、五丁目、備後町五丁目あたりをいふ。

○あだし野 無常野の義、茶毘所のある野をいふ。

○アミドブシ 淨瑠璃を語る一種の節。

○身より思ひの：焦すらん 「後撰集」卷四、夏歌の部に「包めども隠れぬ物は夏蟲(螢)の、身より餘れる思ひなりけり」。

○わけ 汝の義で、杜陽自身をさす。「萬葉集」卷四に「吾妻(若)わかきみは」と、和氣平波死(若)わけをほしぬと、念可毛(おもへかも)し」。

○半太夫 半太夫節をいひ、江戸半太夫が創めた淨瑠璃節の一派。

○冥土の鳥 「伴隨時記菜草」に「冥途の鳥はととぞすの異名」。

○變らめや 冥土に旅立とうとする心は變らうか變りはせぬ。

○三瀬川 冥途にある川で、三つの瀬あるによつてかくいふ。詳しくは「十王經」に出づ。

○綱手 綱手節。ひきづな。

○弘誓の舟 佛菩薩が衆生をして生死の苦海を渡つて涅槃の彼岸に達せしめるのを、舟が人を渡す

隔ての雲の重なりて、二世と契りし仲を裂く、月に水まさ花に風、津村の土手を

あだし野の、其條と草深き、螢かすかに、飛び連るゝ、身より思ひの餘ればや、

蟲さへ胸をや、焦すらん、夜も早いたく更けぬらん、わけと啼き行く杜鵑、まよこ

と冥土の鳥ならば地獄の有様語れ聞こ、聞くともいかで、變らめや、今宵限りの

憂き命、止めて止まらぬ、三瀬川、岸に繋ぎし綱手こそ、弘誓の舟と觀念し、歎

く心は曇れども曇らぬ、空の星月夜、あらまほしやといふ星も、年に一夜の契り

ぞや、譬へば雲の上とても、天の川を隔てなば、人の辛さに變らじな、糸かけ星

の、ほそくと、附添星や、妬むらん思ひ星とは七夕の、縁と聞けどまゝならぬ、

浮世に似たる類ぞや、光も薄く丑寅にあれく見ゆる星様は、ヲ、假のうつゝの

星佛、宿り星とはいつ迄も、妹背變らぬ夫婦間、我身の果はすばる星、ア、思ふ

に喩へ言つた詞。「弘誓」とは、佛菩薩が衆生を濟はつとする弘大な誓願をいふ。

○あらまほし 星月夜にてあらまほしを星にいひかく。この星は牽牛、織女星をいふ。この二星は天の川を隔てて居り、毎年七月七日の夜の一度のみ交會するといふ。

○譬へば 「たみひ」といふ意の誤用であらう。よしや。

○糸かけ星 いとし思ひを懸け星(牽牛、織女星)を糸にいひかけて、「細々の縁語につづけた。

○ほそく 細々をいひかく。私語する意。

○思ひ星 相思の問答を牽牛、織女の二星。

○星佛 北斗明星七曜九曜二十八宿を佛像にかたごつて佛名を當てたもの。

○宿り星 塵を移し居る星。

○すばる星 七星をいふ。「すばる」は鏡の義。七星が聚つて鏡べられたやうな像をなせるもの。これに我が身の果のすばれちまると意をいひかけた。

○奈落 梵語Naraka、地獄の意。

○祭文 歌祭文の節。

○女はいとど罪深く 女人は罪業深くして五障ある上に、なほ三從にて自由を制するものがある。

○忘れ水 従ふ道も忘れに、「女は水性」の誑をきかせて、かくいうたのであらう。そして後にある縁語濁江に應じる。

○紐の星 女が懐胎五月で腹に紐帯をする時、胎兒の守本尊は地藏菩薩で、之を星に配すれば武曲星である。「都の」さいへるは、お千代は京生れであるからである。

○濁江に浮かれし 娑婆(現世)にうまれ出た意。

○普き門 普く選ばれる門の意で町中(まちなか)をしをいふ。そして「法華經」普門品をいひかけた。

○重願寺 大阪市天王寺區谷町八丁目にあつて、寺内に觀音堂第十七番札所がある。この文は、「一念の二に對して十を重願寺につづけた。

○念彼觀音の力星 「法華經」普門品の文句「念彼觀音力をとつて、力星にいひかけた。

○力星 カミなつて自分を守る星に當る本尊をいふ。(昔の人は、自分は何性(しやう)で何の星の生まれなぞをこゝろしたものである)。

○利劍即是 念佛をこなへる功力は、無明の煩惱を斷絶すること、恰も利劍で物を切去る如くであるとの意。(般若舟に「利劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除」。

○いさめ なぐさめ。

まひ心からたとへ奈落に落つるとも、跡に歸らじさりながら、女はいとど罪深く、

從ふ道も忘れ水、哀れ都の紐の星、結び目解けて濁江に浮かれし事を思ふには、

普き門に立寄るも爰ぞ一念重願寺、念彼觀音の、力星助け給へと諸共に、心を

こめて願ひ星亂れ、心の亂るゝとも、利劍即是の誓にて、心やすく極樂に至り

至らん此方へと、互にいさめ進む身の勸進、所にぞ著にけり

捨つるに極めし、身の上も、そごろに心細げにて三途の川は目の前の、麥吹く

風の小波や、空淋しくも名乗るてふ、死出の田長を友がねに、さいたら島の案山

子かと、見るにつけ聞くにふれあの世に、たぐふぞあぢきなき、半兵衛お千代に

差向ひ、此勸進所のお寺には談義の絶ゆる時もなふ、千萬人の參詣に一逼づつの

御回向も、つゝに罪障即滅の法の縁こそ頼もしき、爰ぞ最期の場所」とやがて用

意を敷きかくる、朱の袴の毛氈や嘉兵衛がくれし其時は、長く身上持ち堅め町屋

住宅据へよとの、心には今引替へて死出の門出の相庭未來は蓮の臺とも、變じて

浮むよすがぞ」と二人しづかに座を占めて、人間一生あざなへる繩の如しと傳へ

しは、今日の身の上、八軒屋で出合ひし時互に書置明かし合ひ、危き命を夫婦

○勸進所 大阪市天王寺區生玉馬場先(生玉神社の東北)にあつた奈良大佛殿勸進所。

○三途の川 冥途にある川。三瀬川ともいふ。「十王譚談抄」此河に三の渡有之、故に三途河云也。三羅道を河に喩へ、以て冥途にある河としたのである。

○しでの田長 時鳥はとぎすしの異名。「しで」を死出に取つて冥途の爲とする。

○友がね やがて友となるべき者。「がね」は、やがてそれとなるべき候補者の意を示す接尾語。

○さいたら晶 大阪千日薬所の傍のあざ名である。よつて以て三味所のこまにいひ、また箕土のこまにいふ。詳しくは「近松語彙」を見よ。

○案山子 魂が身を離れたら、この身體は案山子であるかと思はれたのである。この案山子は麥畑の縁語。

○あの世にたぐふ 死んで行くべき世になぞらふ。

○談義 對談法義。佛教の法話。

○罪障即滅 佛果菩提に到達するに障害となる罪業安執が即時に消滅すること。

○浮むよすが 亡者の霊が安念を脱して淨土に往生する縁。

○人間一生あざなへる繩の如し 人間一生の福福は絆へる繩の如く、禍思つた事も福となり、禍思つた事も禍となり、變化常なしとの意。「漢書」置道傳に「禍之與福兮、何異絆繩」。

○八軒屋 (既出)

とも遁る、上は老先も、諸白髪まで添ひ果てん、思へば愁の文ではなく、結ぶの

神の守札、末頼もしや目出度やと祝ひし事も夢現、覺むれば元の書置よな、とて

もかくても死神に引かる、縁は辻占の、時のきゑんもなきもの」と身を觀じてぞ

居たりける、お千代はいとゞ打萎れ「心中といふ二文字は、流れの女に限りしと

昨日は餘所に思ひしに、今日は夫婦が身の上に飽きも飽かれもせぬ仲を、由ない

障りに隔てられ徒に朽ち行く是非なさ」と平伏し、てこそ泣きにける、半兵衛涙

にくれながら、「ア、おろかなる悔みごと、兎角二人が腐り合ひ、切られぬ縁を恨

むがよい、女房去るに七つの法、去らぬに三つの教へあり、中にも親の氣に入ら

ぬ女房に添ふは不孝なり、又去所なき妻を去るは夫の義にあらず、とくに暇をや

つたらば孝行の道は立つ、しかしそなたの親里は、養ふ風情もない貧家、すりや

○夢現 夢が現在の義、以て夢が現在かおぼろけなるにいひ、夢幻の意にいふ。

○辻占 辻に居て往來の人々の言葉聞き、それによつて事の吉凶を判断すること。この文は、當に八軒屋の辻に立つて、互の書置を縁起好まものに占うたこと。の意。

○ぎえん えんぎ縁起の倒語。現今の言葉に「縁起の好い」又は「悪い」を「げん」の好い、又は「悪い」といふ、「げん」も「ぎえん」の約りであらう。

○心中 情死。

○流れの女 遊女。(見索引)

○くさり合ひ 男女契り合つて離れぬをいふ。「くさり」は縁の義、つながるをいふ。

○女房去るに：三つの教あり 「大藏經本命篇に「婦有七去、不順父母」去、無子去、淫去、妬去、有三惡業去、多言去、竊盜去、有三不夫去、有所取無所歸不去、與更三年喪不夫去、前貧賤後富貴不夫去。

○十藏 遠州濱松藩士山崎十藏で、半兵衛の實父。

○物體なや おそれ多いわい。「物體なし」は、
様體の無くなるを惜む意よりの轉義。

○ほにあらはれて 心の色が表面に顯はれて。
○道ならぬ歎き 子は親の死を見送るが願當
であるのに、それに反して子が親より早く死して、
親に嘆きをかけること。

○入まい 入米である。訛つて、「いりまひ」、「い
りまへ」ともいふ。もとの米の收入をいうた語である
が、轉じて廣く收入の意。近松作「心中宵庚申中
之巻に「千世も大坂にれつきとしたる架取て、身の入
まひは上田の田島世話をやきやめば。」

○ほとりも知らず 物思ひにくれて心頭倒錯
亂し、自分が居るあたりも失念し。

○利劍卽是彌陀號 既出の「利劍卽是」を見よ。

去所いどころない同然、去るに去られぬ教へなり、此二道ちしほに差話さしほり斯さくなり下る有様は、

もとより覺悟」詞にはいへども洩る、露涙つゆなみだ痛いたわしや十藏殿、常さへ武士の突

詰めた、氣質ながらも半兵衛は、武士を捨てよと御意見は、我が行末あんそんを安穩あんえんに、

あらせん爲の教へをば今やみやみと死したらば、さぞやお悔くみ歎なげきの程、思ひや

るさへ、物體ぶつたいなや、養親やしやうおやの仁右衛門殿、お氣の弱よわい生れつき、此譯わけを聞き給は

ば老後の憂うれい持病ぢびやうの種、彼といひ此これといひ一方かたならぬ不孝の罪、空恐そらしき身の上」

と口説くちえき、立つればお千代も亦、穗ほにあらはれて叫さけび入、「ア、我とても道ちかならぬ、

歎なげきをかくるは同じ事、老いたる母の手一つに、育て上げられ人と成り丁度今年

が二十四の、年重としなれど今日けふが日まで、是ぞと思ふ孝もなく、遂には刃やいばに身を果

し、愁うれいを見するばかりかは、入いまへの程世渡せわたる業、老の湯水ゆみづは誰たが取つて御心を

休むべき、不孝とも拙つたしとも、我からわかぬ身の上を、赦ゆるしてたべや母様」と、

ほとりも知らず手を合はせ「わつ」と、ばかりに、泣きまどふ、半兵衛は顔を上げ、

「ハアいつまで言うても同じ事、夜明けぬ先に最期さいごをば心靜しんじやうかに遂とぐべし」と、

西地に向ひて手を合はせ、「利劍りけん卽是彌陀號、南無阿彌陀佛」と、回向かいかうする、お千代は

○沈む 愁歎に沈む。

○西宮 兵庫縣西宮市社家町にある西宮神社をいふ。西宮惠美須と稱して名高い。祭禮は正月十日で、世に十日惠美須といふ。

○あだの思ひ はかない身の思ひ出。

○偈 梵語偈陀の別譯の略。頌と譯し有韻の詩である。漢譯せるものは、多くは四言・五言或は七言など、四句・五句・六句・七句などを以て一偈をなす。「願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國」などは五言四句の一偈である。

○一首 一首の歌。

○經帷子 死者に著せる淨衣に、南無阿彌陀佛又は梵字或は漢字の偈頌を書いたもの。

○はる／＼と／＼ざざんざの聲 濱松風に誘はれこの文句は前文にある來て、非業の最期を遂げるべく涙に沈む身となる。それに、涙の松が風に揉まれて、濤聲と共に騒がしい聲を立てるとの意をいひかけた。

○古へを…名こそ惜しけれ 過去の何事も捨ててしまひたい、義理も思ふまい。然しながら、身は朽ちても、心中若し不孝者よといふ、その汚名の消えぬことが残念であるとの意。

沈む涙さへ落ちて乾かぬ小硯を、懷より取出し、斯うなろうとは知らずして西の宮参りして、須磨や明石の名所をも、記し置かんと求めしが、今引替へて書置の、御用意もや」と差出せば、ナウよい合點さりながら、我一代の書置は懷中の状箱、心にも文言にも死する時節に二つはなし、其方こそ早ふ書置しや、「イヤ私とても先達つて去られた時の書置が、伯母様の手にあるからは、是ぞ末期の留め筆、

あだの思ひの數々はとてもに書きは盡されず、然し辭世の言の葉を殘し給へ」と勸むれば、半兵衛領き筆を取り、げに世の常に死したらば、野邊の送りの引導に一句一偈も受くべきに、この儘行かんはかなさよ其方も一首口ずさみ、自らはを引導とも經帷子の梵偈とも、回向の種」と案じつ、硯引寄せ書附くる、文字もちら／＼星月夜、詠み續けたる其歌に、「はる／＼と濱松風に揉まれ來て、涙に沈むざざんざの聲」、お千代同じく斯くばかり「古へを、捨てばや義理も思ふまじ、朽ちても消へぬ名こそ惜しけれ」と、兩首一所に卷納め、半兵衛は懷中より件の状箱取出し、辭世に相添へ前に据へ、思入たる體なりしが、胸押くつろげ脇差を、すらりと抜いて脇腹より、前へなけば引廻す、お千代は取附き聲を上げ、「こは情なの

○わるびれず 心おくれず。臨せず。

◎抱帯 細く新けた婦女の扱帯「しじまおび」をいひ、著物をからけて抱へたやうに纏ふから抱帯といふ。

◇天婦共に腹帯をする。よつて「二腹帯」と題名したのである。

○追腹 主君の死を傷み、臣が其の跡を追うて切腹すること。殉死。

○十藏が封印：道理なり 親十藏が、「汝の短慮によつて討果すな、生きてゐてくれ」と、戒めて封印した起請文も、我が自害すればそれを破る事になるが、然し我の自害は亡君への殉死であるから、起請文に背かず破らぬ道理である。

○帯の祝ひ 胎兒五月になれば腹帯をする、その祝ひ。近松作「せみ丸」懐胎十月の由來の條に「扱五月に及んで、纏る腹帯や地藏菩薩の受取なり」。

御事や、女は心愚かにて覺悟してさへ狼狽ゆるに、ひとり先立ち給ふのは、扱は我身を捨るのか、恨めしや胸慙」と悶へ慄ひて歎きける、半兵衛ちつともわるびれず、女心の淺はかさよ、是程の傷で死なんと愚かなり、様子あつての切腹、抱帯を二つに切り其一筋にて切口を、急いで巻け」と聞くよりはや周章て、ほどく抱帯、心は何と白縮縮用意の剃刀取出し、せき狂ふ手も震いながら、やうやう中より押切つて夫の肌を引廻し、しつかと締めてうろくと顔をながめて涙ぐむ、半兵衛詞おだやかに、「そなたが最期の顔も見ず、何しに先立ち行くべきぞ、此脇差は某が此地へ養子に来る砌、主君よりの拜領、武士の刀は忠義を旨とし、町人は又禮儀に差す、大切の一腰を武道にも用ひず、禮儀にもかゝわらず、穢らはしき兩人が最期にばかり使はん事、物體なし冥加なし、武士の眞似して引廻すは主君忌の追腹、山脇氏に立戻れば親十藏が封印も、破つて破らぬ道理なり、是からそちと死ぬるのが、今の八百屋の半兵衛ぞ」と、齒を食ひしめて息をつぎ、「これお千代、その半分の抱帯、そなたが腹にしつかと締め、四月になるかならぬ子に、せめて末期の祝ひ納め、世にあるならば來月は、帯の祝ひよお乳母よと、

○つづめて 一つにまぎめて。

○頭堅かみかたかれ 頭の堅い兒は頑健であるといふ。堅固けんこにてあれ、健全けんぜんなれ。「東海道名所記卷之三に、「園子一千をつくりて持ちて參れば、子供こどもの首かみかたじとや申し傳へし。」

○いはだ帯 懐妊くわいにん五ヶ月に締める腹帯。「いはだ」は齋いはい肌はだの義、岩田いわのたと書くは、堅固けんこなれと祝するからであらう。

○産土うぶつち神様 鎮守ちんしゆの神様。氏神うぢがみ様。

○山かづら 曉あけに山の端はたにかかる雲をいふ。「櫻湖おうこ集しゆに「やまかづら」の條に立雲たてぐもを山かづらといふと、綺語抄きこしやうに見えたり。「拾遺しゆい集しゆ」上、關白せきはく左大臣さだ家百首ひゃくしゆ、郭公くわくこうの歌に「山かづら、明け行く雲にほととます出づる初音はつねも逢あはるなり。」

○晨朝あした 明け六つ時むつとき(午前六時)の稱。晨朝あしたに撞鳴つづならす鐘かねの聲。

○露つゆ持もち 餘あまる風情ふうじやう お千代ちよひが若わかくて、氣品きひん高く美しい顔容かほように涙なみだの流ながれるを、花はなに露つゆがかかつて、清きよらんばかりに濡ぬれてゐる風致ふうしに喩たとへた。

さも勇ゆうましくあるべきに、明日あすをも待まちたぬ今の身みは、五月いつつきとも産月うぶづきとも、つづめて

て名残なごりを惜おぼしむぞ」と、そゞろ涙なみだにくれにける。お千代ちよひは帶おびを取とり上げて、しやく

り上げ、前後ぜんご涙なみだに、沈しづみしが、生なれぬ先に行末ゆきすえを頭堅かみかたかれといはだ帶おび、それは

世よにある人の事ことはそれとは引替ひきかへて長ながき別わかれの親子おやこの縁ゆかり、斯かくなる身みとは知ら

ずして嬉うれしや子をば産うんだらば、二人ふたりが仲なつの樂たのしみに、明暮あけくれれ抱だいつすかしつの、

愛あいらしい事こと見る度ほどに憂うれしが中なかをも打忘うれ、夫婦ふうふは猶なほも親おやしみの媒なか介かとなり一つに

は、世よに子こを持もてば世帯よどじみ、なり形かたちをも窶うすとも、然しからば我われが思おもはずの伊達だても

自然しぜんとやむであら、姑御しやうごにも氣きに入いらうあら嬉うれしやな産土うぶつち神様がみさま、平産へいさんさせて給たまは

れと、願ねがひし事ことはいたづらに、身持みもちながらに消きへて行く、名残なごりは我われが身み一つにて、

別わかれは二つ人間の種たねを斷たつのも同じ事こと、何なにの咎とがなき腹はらな子を、共ともに死しなす不便ふびん

さよ、許ゆるしてくれよ」と詞ことばさへ、泣なく、帶おびを取とり上げて、肌はだに廻まし引締ひきぢめて、顔かほ

見みぬ母ははが形見かたみぞ」とかつばと、伏ふして泣なきにける、はや引渡ひきわたす山やまかづら寺てらの晨朝あした告つ

げ渡わたれば、いざや最期さいごの時ときこそと座ざを打拂うちわひ身構みかまへす、お千代ちよひは覺悟かくごの面おもざしも

名残なごりの花はなのあてやかに、露つゆ持もち餘あまる風情ふうじやうにて手てを合あはせてぞ坐ましにける、半兵衛はんべゑ

○たゆく　たるし。にぶり。
○おくれし　氣後れた。

○輪廻　執著。衆生は此處に死し彼處に生じ、地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道に輪轉すること、恰も車輪のめぐりが如きによつていふ。よつて輪廻云執といひ、執念の意にいふ。近松作「出世景清」に「二輪廻したる女かな」。この文は、お千代が夫を慕うて附きまつはる執心の盡くるなき意。

○四つ　地水火風をいふ。これを四大といひ、四大に空を加へて五大といふ。四大又は五大は物質的要素で、人間の肉體を構成するものである。人の身體は四大を借りて出来たものである。西鶴作「一代男」巻四に「世は五つの借物、取りに来た時、閻魔大王へ返さうまで」。近松作「せみ丸」懷胎十月の由來の條に、「四月めは地水火風の五輪悉く列りて」。

西鶴撰「日本水代篇」巻一、初午は乗つて来る仕合の條に、「銀徳にて叶はざる事天が下に五つ有り」とある、五つも五大であつて、以て人の壽命の意にいふ。索引によつて「地水火風」をも見よ。
○主の縁の一尺五寸　當て主君から拜領した一尺五寸の藍綬の脇差。

○花過ぎ頃　陰曆四月なればかくいふ。情死したのち享保六年四月五日宵庚申の夜である。
○武道の燈かかげた　半兵衛は武士の子であるから、さすがに深い最期を透して、武道の光を見せたこの意。

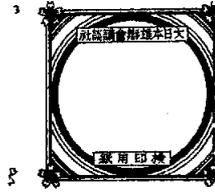
につこと打笑ひ、ヲ、出来たりいさぎよし、未來は一處を迷ふまじ、今を限りと脇差を、取直せしがさすが又、長き別れの顔ばせに、心も騒ぎ腕たのく、差附けてはためらい突かんとしては堪へかねて、暫し時刻を、移せしが、南無三寶後れしと、氣を取直し一心に「南無阿彌陀佛」と刃の先、喉にぐつと突通せば、「あつ」とばかりに身を悶へ、手足を伸べて苦しげな、中にも夫を打守り、打守りたる一念の、輪廻の心ぞ、果しなき、されども四つの借り物を返ししまへば油無き、燈火消ゆる如くにて、がつくりと伏す有様は哀れにも亦惜しかりし、いで追附と半兵衛、主の縁の一尺五寸最期の際と押戴き、只一刀に喉笛を貫かれて死したりけり、生年既に三十八、花過ぎ頃の若緑木の下闇は青物屋、町人なれど古への、
※武道の燈か、げたる末に、名をこそ照らしける

有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代
東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治
東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞
東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)
電話(34) 代表 五六二〇〇番
牛込(34) 代表 六二〇〇番

(本製地海天)